

連
句

猫蓑作品集Ⅶ





序

平成八年九月に開催された国民文化祭とやま96連句大会は、はじめて歌仙形式による募吟をした事によって、画期的な大会であったと言えよう。

応募の数も六百三十三巻という数に上ったが、大賞を受けた十一巻の中に、猫蓑の作品左の六巻が入っていたのは、ご同慶の至りである。

- | | | | |
|---|----------|-------|---|
| 1 | 「金平糖」の巻 | 原田 千町 | 捌 |
| 2 | 「誕生日」の巻 | 秋元 正江 | 捌 |
| 3 | 「月渡る」の巻 | 副島久美子 | 捌 |
| 4 | 「泡雪の」の巻 | 鈴木千恵子 | 捌 |
| 5 | 「流星の綱」の巻 | 坂本 孝子 | 捌 |
| 6 | 「年の暮」の巻 | 今宮 水壺 | 捌 |

これは受賞された方々の名誉であるとともに、ひたす

ら蕉風俳諧の復活を願って、毎年猫蓑作品集を出版し、研鑽し続けて来た私どもの努力が一応の実を結んだという事になるであろう。

猫蓑作品集は、今年も各位のご協力によってⅦを出版する事が出来た。作品数は去年よりやや減ったが、それだけに精撰されたものである。また去年にならって、作品の批評・鑑賞例も示すことにした。

これらを精読されることによって、真に新しい蕉風俳諧への道を発見されるよう念願する次第である。

平成九年二月二十八日

東 明 雅

目次

序 東 明 雅

初しぐれ 東 明 雅 6

連句批評の基準をめぐって 8

東明雅・上田溪水・土屋実郎・小

林しげと・引地冬樹・別所真紀子

・佛淵健悟(順不同)

司会・文責 式田和子

歌仙

誕生日 秋 元 正 江 捌 26

花の冷え 市 野 沢 弘 子 捌 28

鬼子母神 今 宮 水 壺 捌 30

梅雨晴間 岩 井 啓 子 捌 32

憂国忌 内 田 麻 子 捌 34

風の 梅 田 利 子 捌 36

うららかや 小 野 シ ズ 捌 38

牧水忌 大 窪 瑞 枝 捌 40

江戸絵図か 加 藤 治 子 捌 42

桑解けば 加 藤 道 子 捌 44

鳥渡る 金 久 保 淑 子 捌 46

新涼や 蒲 原 志 げ 子 捌 48

石路の花 上 月 淳 子 捌 50

紅梅や 文 音 貞 子・瑞 枝 捌 52

淡雪や 近 藤 守 男 捌 54

銅鐸や 坂 本 孝 子 捌 56

冷泉家 佐 古 英 子 捌 58

雪積んで 佐 々 木 有 子 捌 60

裏町に	予感と化学式	立春や	黄落期	雪解川	老鶯	荒南風の	片蔭	住みなれし	冬ぬくし	初鶴や	白寿の媼	あぢさゐや	月を待つ	春雪や	摩耶嵐
両吟 玲・英二	日 高 英 二	東 郁 子	原 田 千 町	八 角 澄 子	橋 野 代 々 子	中 田 あ かり	中 川 哲	豊 田 好 敏	田 村 満 子	橘 文 子	鈴 木 美 奈 子	杉 山 壽 子	下 鉢 清 子	島 村 暁 巳	式 田 和 子
92	90	88	86	84	82	80	78	76	74	72	70	68	66	64	62

上る月	二十韻	トーテムポール	草の実の	春浅し	蘭麝香	狭霧霽れ	源心	はぐくみしもの	良夜	ボジョレヌーボー	螺鈿の琵琶	秋小寒	萱の門	秋薔薇	去来かな
久保田 庸 子		副 島 久 美 子	篠 原 達 子	倉 本 路 子	木 村 真 呂	神 谷 安 子		由 川 慶 子	山 崎 一 恵	山 口 美 恵	本 屋 良 子	松 本 碧	本 田 弥 生	佛 湊 健 悟	文 音 冬 乃・健 悟
124		120	118	116	114	112		108	106	104	102	100	98	96	94

北風 五味 蓉子 捌 126

落花續紛 権頭 和弥 捌 128

岩瘦せて 佐藤 良彌 捌 130

蔦紅葉 須田 智恵 捌 132

螢袋 高瀬 美保 捌 134

帯解や 武村 利子 捌 136

初時雨 田部 みどり 捌 138

梅雨明けや 塚本 泰子 捌 140

小名木小春 中島 啓世 捌 142

冷やし馬 両吟 かりん・水壺 捌 144

百人町 八代 嫺 捌 146

半歌仙 小園 好 捌 150

秋深き 真田 光子 捌 152

満月 谷本 守枝 捌 154

夏座敷 椿 紀子 捌 156

パセリ刻む 156

賀茂祭 長崎 和代 捌 158

夕顔や 原 みね子 捌 160

昼の酒 膝おくり 政志・ 162

万菊の 矢崎 藍 捌 164

春北風 吉村 ゑみ子 捌 166

百韻 文音 健悟・淑代 170

うたぐるま 下鉢 清子 173

あとがき 173

メーデーに外苑通り最後尾

女性首相の出現はいつ

木菟は久遠の叡智司り

すばるを数へきれぬ凍天

玉子焼黄身はっきりと焼き上げて

単身赴任髪がやや薄

脛の皺ハイソックスのミニの脚

ダブルでこなす援助交際

虚と実の二つ折りなる夢の娑婆

樹海を走る洞窟のあり

月蒼く誰かどこかで呼んでゐる

老の衣にすがる蜉蝣

菊人形顔の意外に小さくて

折本仕立てで貰ふ詩画集

買うて来しガラス風鈴猫がじゃれ

ひねもす廻る理髪看板

花吹雪天狗の散らすくらま山

雛祭りのお膳供へる

石 枝 藍 同 枝 藍 穂 枝 町 石 藍 町 石 穂 枝 雅 執筆

平成八年十一月三日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

連句批評の基準をめぐる

東 明雅・上田 溪水・土屋 実郎

小林しげと・引地 冬樹・別所真紀子

佛淵 健悟（順不同）

司会・文責

式田 和子

平成八年十二月十一日

於 千駄ヶ谷 鳩森八幡宮社務所

司会 本日は年末ご多忙にもかかわらずご出席いただきありがとうございます。

今回は、連句につきましての正しい鑑賞、批評が、これからの連句の発展に必要ではないかという、明雅先生のお考えから、先生方のご意見を承りたいということでご案内申上たわけでございますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。明雅先生、どうぞ。

明雅 ご案内の中に書きましたように、近時、連句の発展は目ざましいものがあり、各地で全国大会がもたれるなど、愛好者としてご同慶の至りですが、その反面、肝腎の作品そのものはあまり質的向上が認められませんか、

一層混乱しているように思われます。

その理由は様々でしょうが、一つには連句批評の原理、あるいは評価の基準が確立していないことにあるかと存じますので、これらの問題についてご意見を伺いたいとご案内申し上げたわけです。

ちょうど、私が連句はどう展開していくかについて考えていたのとタイミングがぴったりで、連句協会報（93号）に、尾形仿先生の「連句の実作と鑑賞」についての論文を読み、自分と同じことをお考えなのだと思います。しかし、私は私なりの考えもあるし、皆様方にもそれぞれ、お考えがおりと思いますので、どうぞ、忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。

司会 お話のきっかけとして尾形先生のご論文が出ましたのが、溪水先生いかがですか。

溪水 作る方々も鑑賞される方々にもいろいろのお考えがありましようから、皆さんのご意見を集約して考えたいと思います。

冬樹 私は初心のほうですのでよろしくお願いします。今日、お招きいただいたのは、八幡様のお引き合せという気がしますし、今日からが発売というような気がします。連句については、若い頃から、連句の文芸性は何か、という事が気にかかっていました。連句の入門書はほと

などが式目中心のハウツウものです。しかし、子規が棄てた連句を、どう乗り越えて再びよみがえらせるのか。

子規の課題を解かなければ「現代の連句」はないのではないか、と思うのです。戦後、桑原武夫の「第二芸術論」が出て、俳句の人々はそれを必死に乗り越えようとした。現代連句も「子規」を乗り越えなくては……ということです。

しげと 私も連句歴、まだ二十年くらいで、あまり長い方とは言えません。その過程で『連句年鑑』に作品が載ると、たまたまその一部作品に対して「式目違反集」というコピーを出して批判する人もいて、それを読むと、なるほどこれでいいのか、と思います。反省材料になっています。

なお連句人口はいま八百人ほどに達し、（注・協会登録）少しずつですが増えています。また作品の質も当初に比べて段々良くなっているのではないのでしょうか。

真紀子 連句について、矛盾した二つの立場を持っています。まず、私は林富士馬先生から、詩や小説を書く人は俳諧をやらなければダメだといわれ入門しました。明治・大正の文学者は皆、俳諧をやっているんですね。富士馬先生は、詩人で式目はあまり詳しくないですが、美しい日本語を守ること、言葉を磨くことを教えられました。

これが一つ。もう一つは、近世の女性俳諧史を研究していて、人間解放の場と考えれば、出来る作品の出来・不出来はあまり関係ない。座を作って、連句をやっていくこと自体に意義があるという立場です。連句の裾野を拡げるのも大事ですが、高く輝く雪の嶺がなければ裾野は広がらない。毎月の会では、一歩ずつ山へ登ることを考えたい。裾野で寝ころがるのもいいという、寛容な見方です。

冬樹 いろいろ悩んで考えると、小説の分野でも文芸性のある無がある。吉屋信子や菊池寛などの大衆文芸と川端康成の文学がある。連句だってその開きが当然あるのかも知れない。だが、その開きのなかで、何を良しとし何を低しとするのか。その尺度が必要ではないかと思っています。芭蕉のそれと今とでは時代が違う。芭蕉だって当時は新しい時代の旗手だったわけですから。

浜水 俳句界では、昔は上手い人と下手な人との人数がバランスが取れていたが、今は俳句ブームとて裾野が急激に拡がり、女優などの選句がテレビや新聞に出ると、一般の人はそれがよい句と錯覚してしまう。百年後の識者は、現代を未曾有の俳句人口だが、最も乱れた時代と評すると思います。

連句界の方も、「子規百年の負債」が解け、国民文化

祭に参入出来、裾野が広がるのは嬉しいかぎりですが、質の向上を図らないと俳句界の轍を踏むようになってしまいます。

司会 裾野かてっぺんかの区別を識別するための鑑賞という、今日の話題に入ります。

明雅 私は「式目違反集」は読んでいないが、まず、この会も式目からしっかり論じた方がいいと思います。

しげと あるとき私の巻いた作品に対して、龍肝さん（故人・三好氏）から真っ赤に朱を入れられました。彼の式目に適っていなかったのだと思います。驚きました。

実郎 瓢左先生も同じでした。

しげと 人により甲乙丙丁の式目観があって、どういうものなのでしょう。

真紀子 式目を考えるとき、なぜその式目があるかを考えるべきで、何句去りというのは、連衆の句を生かすための礼儀から出たものと思います。相手を生かし、自分も生かされるという俳諧精神をもって式目を考えていきたいのです。小説にしろ音楽にしろ、構成のマテリアルは俳諧の中にあると思います。式目は式目のためにあるのではなく、一巻の仕上げのためにあると思います。

実郎 式目も結社によって、一巻一字とか、片假名の打越しとかにこだわっている人もいますが、別所さんのいうよう

うに式目のための作品ではないので、いい作品が出来ればいいのではないのでしょうか。

明雅 式目は必要だし、守らねばなりません。しかし、式目にしぼられないよう、細かなことは捌きの良識にまかせたほうがいいのです。

実郎 式目違反集での方式は、斬れる刀で斬り捨て御免というやり方で、個有名詞が二つあればすぐ違反などというのは考えものです。

しげと 『ねこみの』（通信紙）を読ませて頂いております。その中（第21号）に連句は、つねに前進して行かねばならぬ、変化・展開しながら、という東先生の文章が、冒頭に出ています。これは連句の根本原理だと思えます。実作に当り、一步も後に戻らず進めて行くために式目は、連句を連句たらしめるための原則です。連句は一つの形式詩ですから、式目はその形式を整えるために必要だからです。

連句の式目は、連歌の法式を踏襲しているわけですが、そのルールががんじがらめに創作活動を縛ってしまうことも事実です。それで初心は及び腰になってしまっています。法式の緩和は、それを証明しています。とはいえ『ねこみの』紙上の先生の記事は、連句の動かすことの出来ない指標です。

冬樹 式目がきちんと守られていても、俳趣がなければ読む方があきるのではないでしょうか。

しげと ルールと詩趣の合っている作品がよいと思います。

新庄大会の選者をしたときのことです。当面、若干の差合があっても、よいものはよい。そうすれば、素質のある作者の進歩に役立つのではないかと思っています。

あんまりでたらめなのは困ります。詩情の豊かな作品を採る。式目から見た難点を指摘した上で、良質の作品をセレクトすることも親切ではないでしょうか。式目も大切、そして詩としての出来具合もまた勘案したいと思っています。

冬樹 明雅先生が現代に許される範囲で式目がゆるやかになっていくのではないかとおっしゃる。芭蕉も興が乗れば式目を少しゆるめてもいいじゃないか、といっている。これは心と形のせめぎあい。詩情と式目のせめぎあいであって、その緊張度が高いのが詩である。式目という土俵があって、詩の心が結晶するのではないか。土俵の枠を無くしてしまえば散文にすぎない。先人達が式目を精細に攻めたてた流れにあって、芭蕉は式目と詩情の調和を求めた新境地を開いた。橋間石さんは「芭蕉のその後を聞きたい」と言われたが、それは「軽み」の詩情とともに、それをうける「式目の軽み」にも及んでいる

のではないだろうか。

実郎 その納得するところというのが距離感の問題なんですね。新しい座に入ったとき、一寸とまどうときがありますね。新人の場合は二句の距離感に一番悩むのではないですか。

しげと 付合いにおける二句間の余情は、実作の場ではないと把握し難い所があるのでは…。

明雅 私は連句に一番大切なのは「転じ」と思い、それを一所懸命に教えたが、その反面付け味がお留守になってしまった。俳諧の歴史を追ってみても、談林は転じを重んじていたが付け味がおろそかになり、遂に滅んでしまった。その後新しい付け味の「匂い付」が出て来て、それが蕉風です。

冬樹 刀の鑑定力をつけるには良い物を見るしかない、研師の父に教わりました。良い物で覚える。俳諧も同じではないか。芭蕉の七部集などで古典は分かりますが、現代連句でも「俳諧はこれだ！」という手本、秀れた連句集が欲しいです。

実郎 そういうアンソロジー、昭和連句集を瓢郎さんが作るうと何度も提唱したんです。けれども「昭和」となると、吾々の手にあまるということで「現代連句集」を協会で出すことになったんです。

しげと 昭和五十年前後が、大体、連句の復興期になります。当時の練達者が指導して、巻いている作品は読めますね。しかし、連衆のレベル・熟練度が違うと、さあ、どうでしょうか。最近の作品を見て、ただちに文学的に「これが良い」とか、「良くない」とか、一概に決めるのは難かしい。優れた（文学的）作品として俳諧史に取り上げられるには、それなりの時間を要するでしょう。

溪水 「発句は大将の位」（宇陀法師）というが、いいナというものは皆発句がよろしいし、近頃、恋に良い句は少ない。式目式目と目くじらを立てすぎると座の気分がぎくしゃくしてしまいが、あまり式目を離れてはさまにならない。良い一卷を巻くには、一句一句の面白さ、バラエティ、付心、付味、転じ、一卷の山場、余情、品格などが大切です。

しげと よく言われている教えですね。

溪水 もう一つ、一句を引立てるために字余りや、二五、四三にするなど、全体の調べが崩れてしまう。昔の人のように舌頭千転し、耳で聞いて調べの美しさを備えたいと思います。

明雅 アンソロジーの必要性を考えています。現代連句の良いものの作品集がない。これこそノというものを出す責任があるのではないのでしょうか。

真紀子 式目も守れて、言葉も磨かれ良い一卷が出来れば死んでもいいと思う。今日は、式目主義でいく、とか、今日はポエジーでいく、とか月次会では方法を固定しないでいろいろやっています。やり句でも全身全霊でもって作ればよい。片仮名の打越も、流行語同志は困まるがもう日本語になっている「ポケット」のようなものは打越しになっておかまわないと思う。ケースバイケースでしょう。

冬樹 この精神は、作家意識ではないか。芭蕉は最初から最後まで、推敲して作家として命を刻んだと思う。連句という楽しさとは別に、捌き手が作家意識を持つことが必要ではないか。明雅先生が「夏の日」から「新炭俵」まで上梓されて世に問われたのはそういう事になる。集団として作家意識のせめぎ合いで出来たものが本物ではないか。

しげと 太郎さん（宮下氏）が、最近『舞扇六歌仙』をお仲間と出されました。三吟の歌仙が六巻収められています。気の利いた連句集です。それが文芸作品としてどうかは別として、本を出して時代の足跡を残すことは意義のあることだと思います。しかもそういう作品を読んで読み応えがあると、気分がよくなります。

司会 総括的なことをそれぞれ発言いただきました。式

目厳守と、式目はずれていても良い作品もあるのではないか、という鶏が先か卵が先かの議論は永遠のものと思いますが、今日は具体的にお話したくための、叩き台として、「初しぐれ」の巻をお配りしてございますので、ごくごく具体的にお話を進めていただきますしう。

まず、発句から、

深川や翁白髻初しぐれ

しげと この発句は問題が多い。「翁白髻」とあるが、芭蕉はヒゲをはやしていない。そこで、これは明雅先生のヒゲだと気付きました。そうすると先生に対する挨拶であることがわかりました。ところでこの句の切字は三段切です。このような切れ方は、俳句の方では格好がよくないと言われています。立句の場合についても例外ではないと思います。

真紀子 俳句の二句一章から考えても、深川・名所・翁・初しぐれと揃いすぎなのかなあ…と思ったが、猫蓑会で実際にこういう機会があったのなら、囑目の句として許されるのではないかな、猫蓑会としての有り様が分かります。

しげと 一座の認識が一致しているならば、それはそれで

よいと思う。発句は、一句立ちの俳句とは違うのですから。

深水 このままではとても高点はつけられません。髻は奴のような頼ひげです。鬚は顎ひげ、髭は口ひげです。この場合は「白鬚」（しろひげ）とすべきでしょうか。

冬樹 翁の白髻と「の」を入れれば、何段切れという事は少し解消されるでしょう。

明雅先生、お聞きしたいのですが、いい俳句が必ずしもいい発句ではないといえます。私は逆に、いい発句は必ずしもよい俳句だと思いませんがどうでしょう。

しげと 俳句と連句の発句は性格が違います。

芭蕉は若いうちから門人に尊敬されて、翁々と呼ばれていたようです。だから、明雅先生の門下で先生を尊敬して翁と言われたのでしょう。その場の師弟間の意志の疎通・雰囲気伝わってくるようです。

実郎 しかし、翁白髻はどうかと思うね。

しげと これはど議論が出るのは面白い。ともあれ猫蓑会の人達が、先生を尊敬する気持が実感されます。

真紀子 深川に翁白髻初しぐれの方がいいと思う。

しげと ヒゲ（髭・髻・鬚）に関する異論は字彙に拘わらずに、ある人格を象徴的に捉えるということにしては、いかがなものでしょう。

溪水 皆さんは「白髯^{ハクゼン}」という音の響きにこだわっておられる。まして、芭蕉や明雅先生の俳となれば、もじやもじやの類ひげは失礼千万。やはり鬚^{ヒゲ}の字を使いたく思います。

健悟 この発句ですが、私の場合は俳句から入り、それから明雅先生へ連句入門で、連句はまだ八年にしかありません。連句をやってみまして、俳句でやっていた訓練はそっくり生きますし、連句のお蔭で俳句の落ち入りがちなこわばりや息苦しさから自由になれたように思います。現代を生かす連句はどうあらねばならないかというのは、いつの時代の人も苦心したことと思いますが、私自身は、今、もう一度季語を見直すところから……で、いつてみたいと思っています。

司会 猫蓑は人数が多くて、滅多に先生のお席につけませんから、嬉しい嬉しいという気持がよく出ていると思います。では、脇にまいりましょう。

旅をすすむる垣の山茶花

しげと 「旅」「山茶花」などの文字からイメージとして、「冬の日」巻頭歌仙の脇を連想します。打添の脇として、よく付いていると思います。

実郎 すずむる はちよっとどうかな。いざなふ では？
真紀子 発句に定番のブランドが揃ってしまったので、これでないと思切れない。

司会 発句面影で芭蕉と出したわけですから、脇も面影で付けているので、出来過ぎるほどよく受けたではありませんか。

では第三へまいりましょう。

洗ひ立てデニムのタッチ愛づるらん

真紀子 思い切って転じています、愛づるらんで、ゴワゴワした布のイメージが出ていて滑稽もあると思いました。

実郎 発句が他なので、らん止めは普通、他にとるので、他の打越かと思いました。

明雅 これは芦丈先生がよくお使いになったので私も使うことがあります。まったく他の事でなくて、自分の事を遠慮して婉曲にいうとき「らん」を使います。だから、これは「自」ととって、他の打越ではありません。

実郎 「らん」止めは難かしいな。

しげと 留字の「らん」は推量形にとると、どうなるのでしょうか。

明雅 今云った通りで婉曲法の「らん」です。

司会 ここは次の四句目とからめてお話を承りましょう。

ちよつとごめんとまたぐままごと

冬樹 表振りとしては少し下卑たところがあるように思う。しげと それぞれに一門の流儀があります。この四句目は、

これで軽く落ち着いているのではないでしょうか。一門の座の状況を出来るだけ理解して読むことにしたいです。

真紀子 私はうまいと思った。ままごとをしているのを、

またがないと干物が出来ないという狭いアパートのベランダや庭というイメージが広がります。発句、脇がブランドすぎるのでこういう展開になったと思う。

健悟 猫蓑には四句目の定番のようなものがあって、犬・

猫・お茶・コーヒー・煙草一服的なものが多いので、変ったものを出そうと皆、努力しているわけで、そういう点でも面白い締くくりだなと思います。

実郎 どこかで見たことがあるような気がしたので印象に残ったのです。

司会 読者が女性の場合、この句を作った人は女性だと思いますが、大そう共感を呼ぶ良い四句目と思いました。では月へ、

森暗し金の三日月中天に

溪水 これはいいけません。金の三日月が中天に見えることはありえない。三日月は午前十時頃東から昇って、午後三時頃南中します。昼間でですから暗い森から見上げたとしてもせいぜい銀ぐらいでしょうか。

実郎 語呂合せでしょう。しかし、こういう句は頭で作ってはいけません。

冬樹 天象として論理矛盾がありますネ。

司会 六句目はあまり問題がないようですね。

バリトンの唄秋風にのせ

司会 それではウに入ります。

雁渡る覗くブティック店開き

しげと これも三段切れ、上五で切る句仕立が目立ちますね。「渡る」「覗く」と、終止形の動詞が重なりあって、しつこい感じですね。

冬樹 ゆく雁を窓にブティック店開き ならいいんじゃないですか。

真紀子 発句が三段切れなので、ウラの折立は黄金を打ちのめしたようなものが欲しい。前句を受けて、イメージが小さいナアと思う。

冬樹 覗く、がちゅと。人情自としようとしてか不自然です。

実郎 句の中の順序がちゅと？ です。

溪水 渡る・覗く、と動詞が続いてしまった。

雁に街のブティック店開き　？はどうか。それにしても仮名止めが五つ続いてしまった。

しげと いや「ままごと」は名詞です。

健悟 雁渡る、が必然性を感じられません。五句目に月が出ていて、同じく空を渡るものが出るのはどうでしょうか。「覗く」のおさまりが悪いですが、打越が場の句なので、ムリに調整したのかなという感じです。

実郎 雁渡るを使わないでもいいのではないかな。

司会 それでは次の恋を二句続けて参ります。

乳房のはざま光る十字架

実郎 乳房のはざまは前の句を受けてうまくいきました。

あした逢ふ為に別れの手を握り

冬樹 あした逢ふ為に、この「為に」がちゅと気にかか

る。

真紀子 十字架から、手を握るだけ、ととればよく気分が出ています。「あってくれますね」というところですよ。

明雅 「為に」でこの句は生きているのですよ。

真紀子 経験の問題ですね。読者もためされるわけです。

自分の経験の幅を拡げるのによいでしょう。俳というのは、人に非らずですから、自分の事でないと云えるし、恋もできるし。

司会 いつも恋の座は経験云々が出ますが、ウラですから、微妙なところでよしとして、次へまいります。

煙草ことりと落す自販機

真紀子 うまいやり句です。落す。落ちるではありません。

これで、この音が聞こえるのは夜半、静かな神田川の世界が出ました。

しげと この句で粘りを断ちましたね。

健悟 僕は「乳房の十字架」というのは、マネキンのそれと読みたい感じがします。

司会 では、区切りのついた所で次。

ハウステンボスはオランダ風車村

溪水 ハウステン ボスに分かれて読み辛い。

真紀子 ここはこういう句の要るところですね。

司会 ハウステンボスは長崎のレジャーランドですね。オランダ村とかヨーロッパ館とがあります。では夏の月にまいりましょう。

月下に漕げば權のきらめき

しげと 夏の月としては弱い。權は季語ではない。ただし季感はなんとなくあります。

真紀子 表の月と違っていいと思う。

しげと 季語を用いても、季節感がなくて言葉だけが浮いてしまう付句がよくありますね。この句は、はっきり夏季と認定できない。けれども次の句で「ちぬ」（黒鯛）が出て二句で夏と読めます。

ちぬ釣りの外道は釣らぬいごっそう

しげと 「いごっそう」と言うのは、どこの方言ですか。

健悟 肥後もっこすとか、土佐のいごっそうとか、女はは

ちきんとか、頑固なことをいうのではないですか。

明雅 ちぬ以外のものは外道といって放してしまう頑固者のことです。

恨まれもせずほめられもせず

真紀子 いごっそうにはよく付いてると思います。

司会 こういのが俳諧と思います。司会がしゃべり過ぎてしまいました。呆けにいきます。

呆け予防アルミニウムの鍋をやめ

しげと 面白い世相の句ですね。

真紀子 句姿がよくないのでは…。

実郎 やめよ、とかぼかしたほうがいい。何でもかんでもいかんといってもしょうがない。

冬樹 この句の時事性に敬礼です。次の句は写真が並ぶのか、人が並ぶのか。

叙勲の写真並ぶ新聞

真紀子 新聞に写真は当り前ですから顔の方が…。

実郎 顔の方がいいと思った。付けがどの位の距離を持っているのかはかられる句です。

冬樹 前句からみると顔でしょうね。

溪水 これは前の句とよくついていますよ。

冬樹 花は位付け。折端は問題ありません。

大観の六曲一双花篝

酔ひほどほどに菜飯いたたく

ナホ
メーデーに外苑通り最後尾

司会 折端と折立の離れ方としては問題ないと思いますが、

次へもからめて、

女性首相の出現はいつ

冬樹 ナオに入って大いに暴れて欲しい訳で、女性首相に

は時事性があってよろしいですね。

木菟は久遠の叡智司どり

すばるを数へきれぬ凍天

しげと それにしても「木菟は」の句は、格好つけましたね。

真紀子 この句は、ちょっとオーバーな言葉が人間に対する諷刺になっていて良いです。ミネルバは女性。哲学者みたいな顔してますから。

実郎 すばるも。

真紀子 冴えた空をよく表わしています。

冬樹 すばるは、あの星を何個まで数えられるかによって目の良さがわかるといいます。清少納言は「星はすばる」といっており、女性首相からうまく流れています。

実郎 数へきれぬ、というが、もっとうまい表現があるのではないか。

司会 それでは玉子焼にいつて下さい。

玉子焼黄味ほっかりと焼き上げて

真紀子 玉子焼と焼き上げと、焼きを二回使っているのがちょっと、仕上りて、では…。

明雅 すばるまでは緊張が続いているので反対に暖かいものを付ける、違い付という手法です。人の心も和ませるようにするのです。

单身赴任髪がやや薄

しげと 前の「玉子焼」を受けて、前句の、その人の付けで人物像が浮き上り、淋しいなかに俳諧があり、いいなア。

司会 ちょっと哀れですが、恋にまいりましょう。現代風俗です。

脛の皺ハイソックスのミニの脚

しげと 私にはよく分かりません。

冬樹 ミニの脚。いま流行のルーズソックスをはいた女学生
の脚ですね。

明雅 ミニの脚の皺はハイソックスにかかります。

真紀子 ミニの脚、ルーズソックス：では。

ダブルでこなす援助交際

冬樹 ステッキガールが二人でサービスという所でしよう。

渓水 援助交際は足長おじさんのように、学費を援助し卒業を待つなどと正直に聞き及んでいたので、ハダブルで

こなすVが理解出来ませんでした。小生在職中は無かったの。

司会 余計な口を出しますが、单身赴任に若い女性がついて、また一人の男が出て来ては、他に他がからむので、自と目の場合は「からみ自向い」というようになりますから、複数の人間を出して、それを避けたと読みました。

虚と実の二つ折りなる夢の娑婆

真紀子 最初読んだときは、前二句表面的であまりよくないと思いましたが、「夢の娑婆」でぐっと生きました。

「二つ折」はつまり歌仙一卷のことで、座が夢の娑婆であり、現実もまた仮の世であると二重の意味が出て凄
い付句と思う。

冬樹 援助交際とか臍ピアスとか、もう人口に膾炙しています。单身赴任からダブルまでは句の流れの勢いとみていいのではないかと思います。

真紀子 自分なら前二句はとらなかった。お捌きは「夢の娑婆」が出てくるのわかってらしたんでしょうか。これは勉強になりました。

冬樹 ここがこの歌仙の山場と思う。歌仙一卷には山場となる盛り上がりがある、というのも評価基準の一つでしょ

うね。

真紀子 虚と実が一巻の山。お上手。よく出たと思います。

樹海を走る洞窟のあり

しげと 深読みは避けて、純然たる景句を読んだ方がよいのではないでしょうか。

月蒼く誰かどこかで呼んでいる

実郎 気分が変りましたね。

老の衣にすぎる蜉蝣

真紀子 ここにもうひとつ老を出す必要はないのではない
か、単身赴任もあるし、呆け予防、白髭もあるし。

しげと 前句からの移り、しかも言外に無常感も出ていま
す。ただ表現のパターンが古風というが――。

菊人形^{ナツ}顔の意外に小さくて

冬樹 意外性の発見と、序破急の急を引出した句ですね。

文楽の人形なんかも顔は小さいですね。

折本仕立てで貰ふ詩画集

真紀子 上等な本ですね。今は折本やってくれる所があまりありません。京都はお経の伝統があるのでやってくれますが。なつかしいものが出ました。

買って来しガラス風鈴猫がじゃれ

真紀子 四ツ足を出したために猫が出たのでしょうか。私
たちもまだ出ていないものとしてよく使う手ですね。こ
の句作りは、あとから上五を入れたみたいですね。

司会 実作者が揃っていらっしゃるので、作り方までよく
分かるですね。

ひねもす廻る理髪看板

しげと ここで「理髪看板」というのは、言葉が熟してい
ないのではないか。理髪ポールというのではありません
か。

司会 それでは花と挙句にまいります。

花吹雪天狗の散らすくらま山

雛祭りのお膳供へる

しげと 枝折の花のときも、花の次に食べ物をつけ、ここも同じ趣向ですね。

真紀子 初折と発想の地点が同じで、ここは変えて欲しかったと思います。

冬樹 雛祭りは季戻りになりませんか。

溪水 歳時記にも晩春と出ています。地方によっては、陰暦で行事をやっている所も多く、桜の方が早いところも多々あるのです。

明雅 旧暦ですと、雛は三月。花も三月で異和感はありません。

しげと 現行歳時記による問題はいろいろあります。いまは一般の歳時記にたよるほかないのですが、そのため面倒なことをしばしば経験します。

真紀子 挙句としてはよく出ていますが、形としては花の後に食物がちょっと。

司会 これで一応一巻読み通していただいたわけですので、総括をお願いします。

真紀子 この一巻は「夢の娑婆」でつかまれたという感じでした。付け味がよく通っていてよい作品と思いました。しげと 一巻全体として、懷紙式の構成が守られ、よく変化し、同時によく流れ首尾しているという印象を受けました。ドラマのようなクライマックスが欲しいところですね。

実郎 「森暗し」に「金三日月が中天」というのは救いようがないと思います。「脛の皺」も別の表現があったのではないのでしょうか。理髪看板も同じですが。

溪水 今日逐条審議的に個々の句を見て行きましたので、表現の方に視点が向いてしまいましたが、付け味・三句の転じの面では大変よく出来ていると思います。全体の流れや品格も良いと思います。

冬樹 今日連句批評の基準を考えるとという主旨でお引き頂いたものですから、私なりに考えて来たものを申し上げます。

連句批評の基準

- (1) 発句は格調高く俳趣にみちているか。
- (2) 月、花の定座に詩があるか。
- (3) 恋句に人生の艶があるか。
- (4) すぐれた景の句、人情の機微をついた雑の句があるか。

るか。

- (5) 序、破、急をなす「静」と「動」があるか。
- (6) 流れのなかにドラマをなす山場があるか。
- (7) 三句の転じが見事で変化が鋭いか。
- (8) 一句一句の表現が具体的であり、かつなめらかなリズムがあるか。
- (9) 式目から大きくそれていないか。
- (10) 全体として新らしく、現代的であり、創作性（オリジナリティー）があるか。
- (11) 遊び心にあふれ、俳諧味があるか。
- (12) 連衆の丁々発止の気合があるか。

以上です。

実郎 鑑賞の基準について知りたいナアと思ひながら来ました。このところ私はちょっと自信をなくしてるところもあるんですよ。いろんなやり方があってもいいと思うけれど、選者会議の時も、もっと議論があってもいいと思うんですよ。

明雅 富山のとき、選者の会議で議論があったのは画期的でよかったですよ。

しげと この座談会での批評に混乱は無かったでしょうか。
明雅 いろんな批評の原理があって当然と思っています。

真紀子 これだけいいねに一卷を読んだのは初めてでいい勉強になりました。連句ほど読者の踏み込みの必要なものはないのです。あまり綺麗に作りすぎてはいないかとか、反省もありました。今までは作りっぱなしでやりっぱなしだったから。

実郎 問題は基準が決まっていなくても実作ではそうはいかないことです。

真紀子 よく難解といわれますが、ちゃんと付け味通っているのにイメージの持って行き方が分らないと、もう、放られてしまいます。

実郎 いいなあと思うのは、主観ですからどうしてもずれるがある。

溪水 本日の表題「連句批評の基準」について、私なりの選考の視点を持って来ました。

- 個
- 1 発句よろしきもの（挨拶性・格調など）
 - 2 月・花・恋の句（本情が詠われているか）
 - 3 一句一句のおもしろさ・バラエティ
 - 付 4 二句の付心

5 三句の転じのおもしろさ

巻 6 一卷の山場・全体の序破急

7 一卷を通しての余情・品格

障 8 調べの美しさ（字余り・字足らず・二五 四

三など)

9 障りの無きもの(式目など)

余 10 作品への関心度(誤字・脱字・推敲など)

視点はどなたも大同小異でしょうが、配点についてはまちだと思えます。また、今年の国民文化祭のように、歌仙が六百巻以上もあつてはあまり細かく検討する時間がありません。明雅先生の採点法をお教え願えればと思つて今日参つたのですが。

司会 今日はいろいろなご意見を活発に出していただけて本当に有難うございました。それではこれで終らせて頂きます。

後記

東 明雅

私が連句を習いはじめた頃、芦丈先生にどんな連句がよいのかおたずねした事があつた。その時、先生は難かしい事は何も言われず、「玉がころんで、ツブのある句が交つているのがよい俳諧ですだ」と教えられた。玉がころぶと言うのは、付味・転じに無理がなく、一卷の序・破・急が自然に進行し、その中にヤマになるような含蓄のある句が交つているような作品である。私は成程と思ひ、以後三十五年間、一途にこれを守つて作句を続け、指導して来た。

それ故、私の連句採点法は、①一句一句のおもしろさの外に、②前句と付句との付心・付味のおもしろさ、③三句目の転じのおもしろさ、④一卷全体の序・破・急のおもしろさを綜合・勘案して決めることになっており、くわしくは「新炭俵」(九六頁から一〇三頁)に述べている通りである。

今回の座談会では、それぞれの方がそれぞれの鑑賞・批評の原理をお持ちで、一句一句批判され私も教えられる所が多かつた。ただ、私はその時敢て抗弁しなかつたが、もちろん全部承服したわけではない。たとえば発句はたしかに三段切であるが、「目には青葉山郭公初鯉素堂」の例もある通り、三段切が絶対に悪いということはない。

「深川や翁白髭初しぐれ」は深川と芭蕉様とそれから私に對する挨拶に溢れ、これこそすばらしい発句である。白髭より白髭の方が意味の上から妥当であるともいうが、「深川に翁白髭初しぐれ」では作者の挨拶が曲げられ、勢いがないなり、よい俳句にはなるかもしれないがよい発句にはならないだろう。

金三日月の句にしても、「中天」には「天の眞中・天心」という意味の外に「大空・天」という意味があるから、「森暗し金の三日月中天(大空)に」がどうして絶対にいけないのであろうか。

だが、私は一句一句のよしあしもさる事ながら連句一巻の鑑賞・批評は繰り返すようだが、付味・転じのおもしろさ、そして何よりも一巻の序・破・急とヤマ場の盛り上げ方にあると思うので、是非これらの点を皆さんにこの作品を精読することによって読み取り学んでいただきたいと思うのである。

◇
歌
仙
◇

誕生日

秋元 正江 捌

野分あまた越えし病舎や誕生日

亥中の月へ開くカーテン

文化祭ジャムセッションの満員に

甘き香りの煙草くゆらせ

空蟬を載せしてのひら凹ませる

葛素麺の揺るる大鉢

筆太の遊の一字のかすれをり

智恵子恋せし安達太良の山

綿雲がゆくわと腕さし入れて

デイトスポットけふの天気図

曲芸を終えし仔象の欠伸する

きんきんうるさい母は戌年

除夜の月抜けない釘を打ってをり

占ひ信じ襟巻を巻く

なまこ壁蔵の二階の喫茶店

単線電車同好の会

バス停の句会はじめ花の宵

ネーブルのへそ形さまざま

秋元正江
倉本路子
篠原達子
浅賀淑子
眞田光子
橘田富子

代達代光美同達光文光代

復活祭準備やうやく整はん^{ナホ}

ごみの袋をならべ「芸術」

拾ひたるテレフォンカード百度なる

遠き故郷少し引き寄せ

燕の子軒端に小さき嘴揃へ

開店スーパ―氷菓配らる

出身はウランバートル大髻

毛深き胸をつたふ馬乳酒

失神の女横抱き奪ひ婚

甘櫃の丘雷の里

崩れたる長き土塀に望の月

焼松茸に酸橘しぼりぬ

秋深き湖沼会議にお供して^{ナウ}

簪目立てる眉白き僧

裏庭の孔雀は碧き羽ひろげ

おろろんばいと眠らせる嬰^{*}

幻の吾が訪ひし花の旅

厨の隅で浅蜷つぶやく

* 九州地方の子守唄

平成七年十月二十三日 首尾
於 鶴巻温泉病院

路文代文同路達路代光美路達路代江路美

花の冷え

市野沢弘子 捌

内陣を出でてこの世の花の冷え

同行二人土匂ふ道

色淡き春の手袋卓上に

暦めぐりて丸をつける子

びかびかに自転車磨く月の庭

大きく跳んだぎすとすいっちょ

鰻^{ウナギ}築見廻るひとの声高く

バックテストで肌を計りぬ

やごとなき種と呼ばれてただのひと

すぐだまされる女かはゆき

連れだちて祇園の裏の川の音

三十六峰渡る夏月

胸病みの麻の布団の重かりし

ファンタジックな絵画かけ替え

お薦めは激辛料理長き列

景気も少し上向いてくる

枝垂梅肩で分けゆく昼下がり

新入社員に贈るネクタイ

下 鉢 清 子
橘 文 子
高 橋 豊 美
登 坂 かりん
市野 沢 弘 子

清 子 文 美 文 清 文 同 文 ん 清 文 清 美 清

北にあこがれみちのくの旅

親亀子亀石に動かず

徒恋深く包む冬靄

リポーターに追はるほどの事もなく

資金隠しの先は外国

化猫のあちらこちらに現はれて

茶漬の後は饅頭にする

月代の母はせつせと障子貼り

燕歸り過疎の故郷

木の^{ナウ}下で団栗独楽を習ふ会

小刀の切れ試すえんぴつ

パソコンの言語は耳になじまずと

入れ籠の管にビーズためるし

花片を掬ひて空へ返したり

丘の上には遊ぶ若駒

平成八年四月七日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

ん 弘 清 文 ん 文 清 ん 清 文 美 ん 清 文 清 美 文 同

暴露^{ナオ}本密かに抱へ春愁に

七面鳥が面疔を病む

コロンブス国旗のほかに卵立て

幾山河越え連れシヨンの仲

席入りに順ゆづり合ふにじり口

懷手して何をお見立て

初霜の一番バスで朝帰り

わがものがほに歩くはしぶと

指揮棒を鞭のごとくにあやつりて

回って来ない褒賞にじれ

蛇行する月下の川のさざら波

地蔵のあたりちちろ鳴きつぐ

爽^{スウ}やかに悪懲らしめる紙芝居

今好々爺昔参謀

水耕のバイオ野菜の流行りきて

すこしつかへるオルゴールなり

少年の仕舞かしこし花の陰

おぼろおぼろにうたた寝の貌

平成八年十一月二十日 首尾
於 雑司が谷 大倉

男 壺 悟 子 志 悟 男 子 志 子 悟 男 子 志 同 男 悟 子

ナキ
長靴の大き足跡春の泥

将棋今宵は好敵手現れ

栓抜きは裸の美女を象りぬ

韃靼人の包ぶくろを繕ひ

最北の神に会はんと出でし旅

暗喩の多き詩集ひもとく

ゲランの香鍵開けてよともたれられ

水中りだと逃げ腰の男

昇進の試験日紙で終る夢

聞き返すこと増ゆるこのごろ

初鴨のはや溜池に陣つくり

半月踏みてもどる保線夫

ナウ
運動会老いも若きも参加して

血液型で選ぶ教室

城仰ぎ抹茶楽しむ緋毛氈

地方都市にもモノレールカー

花やさし日時計の針鈍角に

小石並べて遊ぶのどけさ

*三度罪を犯すと軽犯罪でも終身刑になるアメリカの法律

平成八年六月十九日 首尾
於 栄立院

淳志代同世啓 淳淑代同世啓 淳淑代同世啓 淳淑代同世啓 淳淑代同世啓

憂国忌

天空を鳥影ひとつ憂国忌
 紅葉はらりと散りし足元
 炭俵トラックに積む里に居て
 柱時計がゆっくりと鳴る
 白々と一筋の川弦の月
 新酒の出来を試す倉主
 氷頭^ウ鱈中高に盛る萩小鉢
 何思ふやら彼は無言で
 エンゼルが魔法の杖を振ったのか
 自惚れ鏡で紅をくっきり
 お手製の菓子がいっしか商売に
 小田原評定孫の命名
 月涼し計算通り痩せし友
 風船虫の池に浮かべる
 お役所は悪しき前例から出張
 屈託もなく手話を交せる
 花の下またNGのロケーション
 長脇差に春風の吹く

内田 麻子 捌

今	須	高	五	椿	上	内
村	田	瀬	味		月	田
す	智	美	蓉	紀	淳	麻
ま	保	保	保	子	子	子
子	保	惠	保	子	子	子
紀	保	惠	蓉	紀	保	淳
同	同	同	同	同	同	同

ナオ

山独活の独活と書く文字が好き

鬼子母神さま薬葺きの屋根

ママチャリにベビーは乗せず犬を乗せ

ピザ宅配の団地ホリデー

待ちぼうけ親指の爪また噛んで

笠地藏来る雪の夜の闇

携帯電話持たされ自由失ひぬ

外科ドクターの恋さばくメス

失樂園アダムもイブも同じ罪

慌ててかくす乱れたる閨

月今宵武満徹の楽に酔ひ

ナウ
ころころこぼる蛙の芋虫

弁当のおかず替へつて運動会

ドコサヘキサで頭よくなる

エアメール結びの言葉再見と
オツシ

ぶらんこの丘又夢の中

島々は花に霞める船の旅

北の港に鯁干される

瀬木志

渋谷裕

八角澄

保惠 津惠 蓉同 子麻 紀蓉 惠蓉 子淳 保蓉 紀麻 惠

平成八年十一月二十五日
於 二子玉川富士観会館
首尾

彌生^{ナキ}尽^{ナキ}帰^{ナキ}りし児より土こぼれ

どのテレビにも髯もじやの顔

これからはタブーと決める齡の事

法華の団扇太鼓鎮もる

墓でんと構へる縁の下

羅の香の鼻をくすぐる

O型のあたしは嵐を呼ぶ女

則天武后と人は言ふなり

鑑定の目玉に上がる砂時計

空寝入りしてふと見たる夢

ロケットで月への旅はいつの日か

色鳥渡る城の裏山

老人^{ナウ}の誰にも告げぬ茸狩り

塩買ひに出た鬼太郎に遭ひ

古倉庫甍へりジャズフェステバル

スモーキング・クリーン春の海岸

花霞む六甲日和風見鶏

地震を忘れてしゃぼん玉吹く

小林しげと

安達典

同彌 同達 同利 同彌 同子 同達 同彌 同典

平成七年十二月十日 首尾
於 光ヶ丘近隣センター

うららかや

うららかや都心に開く連句々座

薄紅梅の香り漂ふ

若駒の広き野面を駈くるらん

携帯電話どこでも鳴る

二日月馴れぬパソコンそつと触れ

草相撲では三期横綱

ウ
神主の水干の袖放生会

破門の憂き目道ならぬ恋

赤き糸纏れに纏れほどかれず

お久し振りとおたかさん出る

RV長いローンで手に入れて

解説つきで眺むゲルニカ

風死して流浪の民の歌哀し

冷し酒酌む縁側の月

読み耽ける捕物帖に刻忘れ

マジシャンはだし今の泥棒

子の夢のお伽の国は花の奥

次々生るるちさき逃水

小野
シズ
捌

小野シズ

橘
文
子

近藤守男

五味蓉子

島村曉已

蓉

文

男

蓉

文

同

蓉

文

男

已

蓉

青木泉子

已

牧水忌

まほろばの一朶の雲や牧水忌

尾花を分けて分けて入る月

つややかな赤き林檎を食むならん

トロンボーンはこの窓から

川底に風あるごとしビルの影

犬連れどうし今日は寒いね

福^ウ耳がはみ出してゐる冬帽子

諳じてみし五十三次

絵馬に書くハートマークとふたりの名

天使とばかり思ひ違へて

密室の会議は踊るばかりなり

ヘッドフォンのノイズ調整

北国へ続くトンネル月涼し

進むともなく進むでで虫

轆轤師の作務衣細かく繕はれ

珈琲豆をからからと炒る

裏口へ花吹き抜ける花の茶屋

未刻なりよなぐもりして

大
窪
瑞
枝
捌

大
窪
瑞
枝

淺賀淑代

中田あかり

岩井啓子

市野沢 弘子

今宮水壺

り

代

啓

り

壺

啓

弘

壺

啓

弘

壺

代

鳥の巢觀察当番覗きこみ

いつもベンチに変なをちさん

たまさかの饒舌電気ブラン掌に

岩戸観音ご改築なる

取替へのきかぬ貴方と知りました

命綱引くダイバーの妻

友愛を掲げ新党募るらん

次なる通夜にそそくさと立ち

月仰ぐ地上げの町に住み残り

仕草で釣れる幻の鯨

旅役者おとがひの傷すさまじく

女警視は巴里より来る

コレクション並べ私のミュージアム

天気輪頭つ異次元の声

OAの機器には何故か馴染まずと

穴を出でたる墓を踏みつけ

父の夢はた母の夢花に寝て

しゃぼんの玉の消ゆる軒端

*天気輪 宮沢賢治の宇宙的幻想の造語

平成八年九月十六日 首尾

於 深川芭蕉記念館

啓り 代同 弘 弘 壺 壺 啓 同 代 弘 枝り

江戸絵図か

加藤 治子 捌

江戸絵図か母の便りか落とし文

未央柳の咲き出づる頃

友つどふ葛素麵を手作りに

テーマソングをついハミングし

忘れゐし洗濯物に月射して

粃殻焼きし灰の白々

新走り今年のできは如何ぞや

板長さんの長き揉上げ

叱られて慰めたのが縁となり

「しっかり抱けよ」バイク相乗り

北の島眼下に古きトラピスト

外科学会は午後一時から

住専も可決したなと寒の月

冬至南瓜の甘味薄くし

三田越え有馬の坊の湯治客

大黒柱でんと真ん中

暁の花の息吹に目覚めたる

太極拳に燃ゆる陽炎

加藤 治子
篠原 達子
中川 哲子
加藤 道子
市野 弘子

哲道 達子 哲道 達子 弘道 達子 同道 達子 哲道 達子

加藤道子 捌

惠

ナオ

目かくしの和紙も柔らに雛納め

女系家族で庄屋代々

住専の国会攻防らちもなく

人身事故で電車遅れる

携帯の電話の声も凍てつきて

恵方詣は明治神宮

馬銜^{はみ}嚙まし野生の驊馬乗り慣す

をんな上位の平成の恋

我が背子は眉も刷きますままも炊く

リュック担いで山の辺の道

月蝕の観測小屋に霧晴るる

ナウ

雁の渡りを送る村人

長城のしっぱか秋の嘉峪関

厠もなれて旅も終盤

ビンテージ夢の車を夢に見て

「通りゃんせ」鳴る交差点青

花の下新米幹事忙しく

腹式呼吸笑ふ遠山

平成八年三月六日 首尾
於 鎌倉 おんめ様

敏生翠代淑道 翠代淑恵 淑代生淑 翠代生道 恵

鳥 渡 る

鳥渡る空に風道幾筋も

紅葉かつ散りほのと宵月

今年酒上々の出来笑みの出て

スイッチオンで軽やかな曲

誘ひ合ふゴルフコンペにRV

噴水しぶく苑の石組

青簾くぐる新発意殊勝げに

胸焦がしたる年上の女

ラブレターまとめた束で捨てられる

大統領選大差再選

地震のあと生鮮三品高騰す

モデルハウスの椅子にどっかり

棋譜読めど駒は進まず小半刻

猫の欠伸が犬に移った

月仰ぎ売り声のばす焼芋屋

落第横丁懐手する

花千度御総代のみ張り切りて

爺と婆とが春の感冒

金久保淑子 捌

金久保 淑子

中 川 哲

大 島 富美子

橘 文 子

加 藤 道 子

蒲 原 志げ子

哲 文 哲

哲 文 哲

哲 文 哲

哲 文 哲

哲 文 哲

哲 文 哲

哲 文 哲

哲 文 哲

哲 文 哲

哲 文 哲

哲 文 哲

時代考証鑑定士なり

怨念の刃おろさぬ断頭台

雷さんに臍を取られる

くるまりしタオルケットに夢結び

異性同性問はぬ好き者

番台でまた若旦那転げ落ち

横目でそつと落とす二布

去年今年ひたすら学ぶ四書五經

インターネット宇宙縦横

湖に月皓々と照り映えて

ふらり立ち寄る虫聞きの会

オウ
刈小田に賢治を語る土地なまり

黒板拭きを投げて遊ぶ児

名を成せば寄贈の額も億といふ

土塀の長き屋敷界限

都踊果てし雑踏花朧

酔うて候蛤の椀

平成八年十一月六日 首尾
於 鎌倉 おんめ様

47

新涼や

蒲原志げ子 捌

新涼や昭和の家に廻り縁

壺に一本桔梗紫

望の月刻も忘れて歩むらん

呼ぶ声のあり犬の綱ひく

放課後は主任教授と杯重ね

置きしグラスを伝ふ滴り

御所^ウ眉に稚児の装ふ鉾祭

見とれる頬に恥らひの紅

今といふ今が止ってくれたなら

銅のメダルを取ってブラボー

鑑定団出してみたらは贋物で

遺族集まり泣くは笑ふは

シベリアの月をはるかに星羽白

碧眼の人勇魚捕りをり

笹の穴通すお上の御政令

糖尿病でごろり地下道

例へばの話しばかりの花の宴

名残の春に歌ふコーラス

式田和子
豊田好敏
中川哲
蒲原志げ子

敏和哲げ和敏げ哲敏和哲げ和敏

淡治なる樹々ゆらめきて山笑ふ

灯の消えて素靈よぶ闇

巡業で何時もおいらは殺れ役

三階さんでもぼちはたつぷり

鮎桶を肩に自転車築地河岸

洗ひ髪してすあし駒下駄

抱かれ癖抱き癖両刀使ひ分け

ダビンチの絵に中性の艶

黄金律守離破のルール不即不離

夢に見ました銀河鉄道

邯鄲を育てて月に送りだし

今年煙草を爺様が干す

冬支度母の打ち掛け蔵の奥

キューピー人形首をかしげて

直線が歪んで見える程の酔ひ

卒業証書いづくへか消ゆ

盛る花いささか憂ふ思惟菩薩

風船売りの愛想たつぷり

平成八年八月七日 首尾
於 東五反田 好敏邸

哲 げ 敏 和 哲 げ 和 敏 げ 哲 敏 和 哲 げ 和 敏 げ 哲

耕を終へて正座の四書五經

孤影にいつも病遊ばせ

相場師の昔は鰻今は蕎麦

シースルー透く幽霊の乳

年上の女房に抱かれ蜜の味

やっと覚えた鞭と縛りと

学究のなほ覗き込む虫眼鏡

ファーストクラス背もたれの良き

スカラ座にドンジョバンニの序曲聴く

空白多くまた日記果つ

莫逆の友と月見の茶屋に居て

爺様婆様赤い羽根つけ

鳥渡る虜囚の夢に見たる国

オリンピックに名乗る横浜

若者がナイキ*に群れて直輸入

物理経済みんな漫画で

花の昼吉祥天女なまめきて

蝶の舞ひ込む外郎の店

* スニーカーの商品名

平成八年十一月一日
於 俳句文学館

壺 弘 枝 壺 哲 同 弘 枝 弘 哲 枝 淳 枝

紅梅や

文
音

紅梅や八十路の夫にチヨコレート
鼈甲眼鏡鳥曇る頃

米谷貞子
大窪瑞枝

防波堤ひじき干す香のただよひて

バイクに積める小さき郵袋

雑踏にティッシュを配る宵の月

立食ひ蕎麦にやや寒の背

初^ウ狽の自慢話はきりもなく

時間やりくりこなす逢引

色付きの夢を互ひに描く闇

見えぬところに凝って粹がる

旦那衆声も揃ひて河東節

洗膾の鯉の玉すだれ敷き

月仰ぐ少しこじれし夏の風邪

住専処理の案はひっこめ

庚申の三猿みんな薄笑ひ

チロルハットの地図覗きをり

碧眼の人も誘ひて花行脚

和敬清寂永日の庵

ナホ

くくられて鬼若大根土間の隅

はでなバンダナピアス光らせ

フリーター暮らしきびしきバブル以後

猫ひっそりと爪をとぐらし

立聞きの障子やにはに開けられて

大物しばし泳がせておく

政略の婚は華麗に孔雀の間

腹のややこを隠す打掛

ぼけ役の俺でもってこのコンビ

阿吽の仁王睨む山門

月の道高歌放吟いづくまで

払へば辞書に落つる秋の蚊

ナウ

チーズ削ぐジャックナイフの冷まじく

変へられないの過去と他人は

げんまんの小指からめる婆と孫

幣さやさやと地鎮祭すみ

花映す吟醸の盃傾けて

春惜しみつつ下る大川

子 枝

平成八年二月二十九日 起首
平成八年七月八日 満尾

淡雪や

近藤 守男 捌

淡雪や司馬遼めきし庭の棕櫚

消えなんとして光る引鶴

パソコンの春期講座に連なりて

窓を開ければ街宣の騒

ひそやかな猫の集会照らす月

芒の原は開発を待ち

酒^ッ提げて高きに登る女づれ

紙ヒコーキに彼のイニシャル

熟寝する額にそっとくちづけし

戦の終はる噂流れて

海を越え拳で稼ぐスラヴ人

髭黒々と笑まふ七十路

伝統の風鈴ひびく分校舎

そうめん桶に宿す月影

回状が来るころなれば癩起こし

鞆の値札そのままにして

ふるさとの花見に帰る豆腐売り

顔見知りなる亀が鳴くなり

峯 田 政
今 宮 水
佛 渕 健
近 藤 守

志 壺 悟 男 男 志 悟 志 悟 志 壺 悟 男 男 同 壺

夏^{ナツ}近きみ寺を描くパステル画

駆けぬけてゆく夕映えの子ら

売りものは墨西哥出土黄金の壺

携帯電話^{携帯電話}又も混線

崩れゆく年功序列^{年功序列}悴める

眠る山にて眠るやすけさ

詞には右手使へぬ剣士^{剣士}ゐて

啖^{たん}呵^かくだけで恋のくぜつに

ステッキの先でのを書くもどかしさ

だうにもならぬ土地の値下がり

月疾し隣りの顔も知らぬまま

蟋蟀^{蟋蟀}よりも馬追^{馬追}が好き

オーディオ^{オーディオ}を冬支度する離れ家に

湖面をにる白帆さざ波

ぎったんと媼翁^{媼翁}のばったんこ

お茶の代りに注いだ漢方

法体で花をもとめて歩く旅

峠^峠にかかる朝の初虹

平成八年二月十九日 首尾
於 小金井 近藤寓

志 男 悟 壺 志 悟 壺 志 悟 壺 男 悟 壺 志 悟 志 男 悟

ナホ
大発会銀行株を狙ひ目に

バンジージャンプに躍る一瞬

ロングヘア―梳くたびに抜け地獄絵図

匕首銜へ色悪の見得

泣き所よがり所も知りぬいて

息つく如く螢漂ふ

草笛を吹く少年は母の夢

幾度繰りし韓国語辞書

冬仕度薪積み上げて軒端まで

魔法の森に育つ毒茸

まんまるの月も見にくる幻灯会

金の腕輪で癒す肩凝り

ナウ
巡業に続く本場所大相撲

杜氏荷を解く蔵の二階に

名刹の池には鯉の影動き

斑雪をとかす暖かき雨

自づから万媚の面花衣

都忘れに偲ぶ倅

平成八年十月十九日 首尾
於 緑華亭

吉 枝 敏 枝 同 敏 石 吉 乃 同 石 吉 同 石 子 枝 子 枝

冷泉家

佐古英子 捌

冷泉家普請の屋根に秋時雨

夜長の庫に明月記秘し

おもむろに薄荷の緑酒仕込むらん

チーズおかきを子等にご褒美

公園は犬と犬との社交場

突如はじまる野外演奏

ナイターは両軍乱れ打撃戦^ッ

離婚調停遅々と進まず

火遊びは若き美男と決めてをり

エデンの東蜜誘ふ谷

ログハウス絵皿に積もる塵埃

居直り強盗袈を着て

消費税下げろとわめく冬の月

お地藏さんはいつも笑顔で

故郷がしばらく恋し宅配便

薩摩黒豚駅弁の味

花吹雪海碧ければ海に散る

先帝祭は烏帽子姿で

佐古英子
東明
松本
豊田好
青木秀
生田目常

子 英 子 雅 碧 敏 樹 同 碧 敏 義 雅 義 樹 碧 同 雅 同 敏

オ
レーバンがきらきら光る春スキー

ランプの灯るぬるき温泉

姥捨ての婆にだんだん近づきて

脳軟化症骨粗鬆症

夏燕一心不乱にひな育て

蟻蛭を焼いてあの娘騙さう

ビーナスの豊かな胸にエロス住み

ケイマン島で幅きかす女

赤道の近くはいつも無風帯

月昇る中蓮の実が飛ぶ

小鍋立て潮風よける鰯料理

絲瓜面したF1の覇者

オ
パリコレのスーパーモデル引き抜いて

廃校の庭枯銀杏のみ

命あり夢の如くに五十年

駄菓子横丁ぶらり川越

遥かなる山は朧に花の色

望遠レンズ捕へたる蝶

平成八年十月十七日 首尾
於 電通築地南寮

同 樹 碧 雅 子 雅 敏 義 樹 碧 雅 敏 義 樹 碧 子 樹 碧

雪積んで

雪積んでみんなまあるい村の屋根

ちらとのぞきし仔兎の耳

ラグビーのスクラム大地踏みしめて

おにぎり買ひに夜のコンビニ

移り住み浴びる月光新らしく

書棚に飾る通草むらさき

秋の宴源氏絵巻の帯の柄

姫にはあれど虫愛づる君

声をきくだけでこんなに上気して

酒に混ぜたるいもり黒焼

トランプの占ひ信じ旅仕度

月涼やかにマチュピチュの丘

ざくざくと金貨掘りたる夏の夢

バブルのつけの手枷足枷

「それだけは」父のことばのとぎれたる

運鈍根に貧が連れそふ

持ちよりの料理分け合ふ花の下

蓑笠かけし春の落柿舎

佐々木有子 捌

佐々木 有子

竹田 登代子

倉本 路子

染谷 佳子

今宮 水壺

代之壺 有子 代之路 代之壺 路之壺

亀^{カメ}鳴くと季寄せにありぬ聞いてみむ

やをら取出す桐箱の盃

無礼講なれば許すぞ皿踊り

撒き手拭に総立ちの客

重版の西行花伝売り切れて

小火ではすまぬ風の夜の火事

着ぶくれの旦那すがるを突き放し

青い目の間夫ひそむ押入れ

一千里魔女の簪を借りて飛び

なんぢゃもんぢゃの幹を叩きぬ

瀬戸内の島々浮かぶ望の月

鰯^{イサナ}が鰯に言問をする

小鳥^{ナウ}来てとろりと煮えし三分粥

細身の杖に添ひしこの頃

人形の片手がとれて泣き出す児

「ゴジラ」ジ・エンド銅像となる

花吹雪近くで鳴れるミサの鐘

留学生も共に遠足

平成七年十二月五日 首尾
於 新宿大久保地域センター

路 有 代 之 壺 之 壺 路 代 路 之 壺 路 代 之 壺 之 路

式田 和子 捌

哲 恵 同 と 恵 げ 同 と げ 恵 げ 恵 同 哲

朝寝して鬼の欠伸が隣から

振り鉢巻書けぬ、完”の字

麻雀に吸殻ばかり溜るなり

雷光一閃前後忘却

空魚籠にせてだば鯨二・三尾

顔でお客は取らずお職に

立引きのコツこんこんとやりて婆

茶柱たてば機嫌上々

磯野家のちゃぶ台に乗る通信簿

インターネットでハッピーニューイヤー

笑み浮べ月と会話の大統領

すすめ上手が囃使って

美術展賞も昔の夢となる

アルバムの角そそけ立ち居り

旅仲間バーボンウォッカちゃんぽんに

穴より出づる蟻を数へる

花曇陀羅尼助買ふ坊の裏

春たけなはにとぼる雪洞

平成七年十一月八日 首尾
於 栄立院

と 和 げ 哲 恵 哲 恵 と げ 哲 と げ 哲 恵 哲 げ 和 恵

春雪や

島村 暁巳 捌

春雪や社殿の奥のうす明り

狛犬の耳とまる仔雀

スポーツカー若芝のふちぎりぎりに

携帯電話で受けし吉報

山の端に晃々として真夜の月

水飲みに起きちよつところ柿

苦瓜^ウをレシビと共にもらひたる

駆込寺にをみなあふれぬ

器量よく気位高く恋遠く

こつこつ貯めて海豚見にゆく

七人の小人とびだす大時計

アンパンマンは吾子のアイドル

女学生麦稈帽子斜にかまへ

月を砕きて汲みし真清水

合掌造り世界遺産に加はりし

いぶりがつこの厚切りでお茶

留学生飲めや唄への花筵

蝌蚪育ちゆく空瓶の中

竹田 登代子
佐々木 有子
倉本 路子
島村 暁巳
眞田 光子

子 代 有 光 路 代 有 光 路 有 光

まっ白なスカーフ東風になびかせて

錦江湾をセスナ機で飛ぶ

籠負ひて媼おしゃべり朗らかに

選良たちが議場占領

赤貝の紐のなかなか噛み切れず

ブラハの迷路おおふ枯蔦

警官の帽子ころがる石畳

庭の茶室に熱き吐息す

身八つ口糸の切れたる音かすか

姦夫姦婦はお江戸追放

リストラの肩すぼめゆく月の弓

猫を相手に温め酒酌む

ゑのころを振れば昔の夢出でて

美空ひばりの有線の曲

四丁目十三番地「ゲイ」の店

舶来煙草カートンで買ふ

花冷えの鎌倉廻るレトロバス

おぼろおぼろの切通し坂

平成八年二月十七日 起首

平成八年三月十六日 満尾

於 赤城社会教育会館

藤
田

昭 巳 昭 同 路 代 昭 代 巳 代 昭 代 昭 代 巳 路 代 路

月を待つ

月を待つ池に影置く鳥のゐて

四阿近く色変へぬ松

太筆で「秋」と楷書を鮮やかに

荻を喫ひに立ってゆく人

搭乗のキャンセル尋ぬ登山帽

まひまひつぶりの透きとほる殻

出雲社の玉砂利を踏みぬかづきぬ

体育系の彼に惹かれる

ナイターの中継延びて闇で拗ね

公約捨てて分裂の党

甘納豆残り少なを寄せて舐め

毛衣羽織り通ふパチンコ

病棟の消燈早し冴ゆる月

同じところで九九を間違へ

S・Pで繰り返し聞くモーツァルト

詩集の葉挟まれしまま

花吹雪追ひ来る嬰を抱きやり

春泥を避け自転車を押す

下鉢 清子 捌

下鉢清子

中川和哲

長崎美津代

桑原庸巳

久保田庸巳

島村暁巳

梶井時庸

子巳

庸巳

哲巳

巳

代庸

代庸

津哲

哲同

同

時

時

こんずいの釣らるるたびに捨てらるる

穴場詳しき地方新聞

進学塾腕白坊主が幅効かせ

口業悪業下る仏罰

しつっこいまくなぎ払ひ畦を抜け

葭簀の茶屋に地酒冷えをり

寄り添へばほろりと落ちる付けばくろ

らちくちもなく好む変態

香港製形状記憶のシャツ安値

残留孤児はみんな老い果て

夢に見し弓張月を遠嶺に

夜長嘶を妖精も聴く

ウインドに木の実さまざま入り乱れ

リストラ画家が印象派風

ご自慢は家系図ばかり屋敷門

仮りの此の世の虚々に実々

御衣黄の花の盛りを旅に見ん

キルトを刺して惜しみある春

平成八年九月二十七日 満尾
於 源心庵

清 時 巳 庸 代 哲 哲 代 哲 巳 庸 代 哲 巳 庸 清 時

初^{ナホ}虹の大きく渡る山七里

鴉があさる無人売店

核実験ひとの迷惑かまはずに

いねむりをするこくりこくりと

着ぶくれの子供は座敷童子めき

渦巻く枯葉鎮もれる窪

登り窯たくましき腕見惚れるて

ああじれったいこの朴念仁

ひとり旅宿毎変はる夢十夜

まろき月の出カリヨンの上

ハムレットエイズ氣遣ふ肌寒に

かまどの辺り蟋蟀を聞く

戦^す前の暮しを今も引きずって

チップ弾んでひびく年金

鼻高き碧眼のボーイ最敬礼

本日飛行機時間正確

沖繩に花はまだかと尋ねたり

春の衣裳に染むる紅型

平成八年六月十九日 首尾
於 栄立院

麻 紗 麻 恵 げ 恵 麻 恵 げ 雅 壽 恵 げ 雅 同 紗 恵 麻

白寿の媼

鈴木美奈子 捌

梅雨入や白寿^{*}の媼みまかりぬ

四葩綾なす曼陀羅の図絵

夏暖簾三角重しつけられて

石蹴り遊びはしゃぐ子供等

住みなれしパークサイドの橋に月

新涼の中ロケを見物

中元^ッの故郷の酒を褒めらるる

蔵の葛籠に秘めし恋文

戦鬨帽男の臭ひつきしまま

根府川駅の波頭鮮やか

バンカーで数をたたいてギブアップ

くしゃみしながらまた煙草吸ふ

寒月に念佛和讃鉄の鉢

株主総会もらふてら銭

エンジンを小型に車高低くして

旅に離さぬ歳時記と筆

花守りのわっぱに煮染めゆで卵

めかる蛙のうしろ肢伸び

豊田好敏 鈴木美奈子 式田和子 吉河波奈子 中川哲 松本碧 高橋豊 美同

和奈敏哲 碧敏波 和波 哲

裏富士にカメラを据ゑて土匂ふ
捜査一課の刑事徘徊

屋敷町黄金仮面血を流す

ボルジアの毒いまでも昔も

はぜ癖のついた丸炭もてあまし

おきばりやすを背に受けつつ

爪弾きのふいに途絶えて後は闇

月の出を待ちひそと出る木戸

鯔鱸小鰭を箱にぶち込んで

林檎がぶりとかじる若者

タレントの眉形定規売れに売れ

ココム条項未だ変はらず

かはほりのすれすれに飛ぶ洞の内

夢にまで見る祖父の説教

この辺を潮どきなりと辞表書き

春の日永に励むコーラス

マジシャンの花かぎりなくこぼす指

家族揃ひてよもぎ菜を摘む

*故宇野千代女史

平成八年六月十一日 首尾
於 澁谷連句会

和 敏 美 碧 和 哲 美 同 碧 波 奈 美 波 哲 敏 碧 奈 美

初 鶴 や

初鶴や猫の侍りて齡祝ぐ

香りも高く抱く冬薔薇

凜々と自軫車のベル響くらん

ライトアップの橋を見物

漆黒の天空遙か飛鏡あり

風炉名残りとして集ふ人びと

新^ッ走り武士道強く説かれるて

はんこたんなの瞳にみつめられ

庄内は日除け虫除け男除け

正札褪せて売れぬ生葉

流滴の身南の島に遊びをり

小瓶傾け抄ふ星砂

かきまぜる五右衛門風呂に月凍つる

チェロコンサート練習の弦

壁掛のアールヌーボー気懶きは

発条の壊れた椅子が大好き

花の降る仏足跡に対座して

遅日の丘に分けるかりんと

橘 文 子 捌

橘 文 子

秋 元 正 江

椿 紀 子

岩 井 啓 子

佐 藤 良 彌

倉 本 路 子

浅 賀 淑 代

近 藤 守 男

同 紀 江

代 江

紀 江

彌 啓

江 啓

江 啓

江 啓

江 啓

江 啓

江 啓

脱^{オウ}サラの農夫来りし農具市

自慢混りの愚痴の大仰

虎落笛まづ非常口確かむる

ネット仲間とミステリー解き

三億円強奪されて地に還り

荒ぶりし業旧約の神

「化けの皮剥がしまっせ」と鬻脱ぐ

貞女振り捨つ昼顔の午後

少年のキタセクスアリス青林檎

覗き眼鏡をマンションの窓

蟪蛄は斧ゆつくりと的に向け

大満月の亘る平原

幅^{オウ}少し詰めて形見の秋袷

短篇集の上梓成る夢

ブランド品ハバナたっぷり旅の苞

陶人形の福耳を撫で

羅浮亭に花の粧たをやかに

叡山すみれ淡き紫

平成八年十一月二十四日 首尾
於 綾瀬・プルミエ

彌文路 彌代路 紀同啓 江紀路 代男啓 代路男

田村 満子 捌

遠き日の思ひ出の母春シヨール

遣繰りじょうず年子八人

ぬらりひょん数へ直せばまた増える

青白く行く狐提灯

底冷に保名狂乱村芝居

背中流せば深き爪痕

涙して再婚同志まだこりず

納豆の糸ずるずると引く

おも父のつつがなきやといふ便り

月に目覚めてあれは夢かと

野茂凱旋日米野球秋の宴

カメラ構へる富士の初雪

戦友会旅の名簿に筋をひき

帽子の鐺をつまみ挨拶

学校で教へぬ三味線琴鼓

蒔絵の杯に注ぐ吟醸

こをとろころ天神様の花の庭

畑打つ農夫遠く近くに

平成八年十一月六日
於 鎌倉 おんめ様

正 満 る 満 生 る 生 恵 正 和 生 る 恵 生 正 和 ル 正

住みなれし

豊田 好敏 捌

住みなれし家や土用の青畳

夕立濡らす庭の跳び石

公園の野外演奏賑はひて

飴ほしくなる禁煙の舌

海上に出で初めし月まだ白く

タイヤの下に小さきこほろぎ

駅^ヲ長は牡丹根分に励みをり

誰もひそかに想ふ同じ娘

ラブレター文を書く役渡たす役

ジーンズ二本干してからまる

弟子自白馬耳東風の教祖様

相撲観戦手には熱燭

数へ日の予定びっしり窓に月

民族運動難民も殖え

なんとなくなつかしき顔モンゴリアン

砂で描きし漫陀羅の絵図

一服を庵主の淹るる花日和

耕へし中を猫の抜け行く

豊田 好敏
佐藤 良彌
長崎 和代
山口 みづゑ
内田 麻子
近藤 守男
和田 順子

豊田 好敏 佐藤 良彌 長崎 和代 山口 みづゑ 内田 麻子 近藤 守男 和田 順子 麻 順 男 同 代 順 麻 男 男 男

ナオ

今年また艾草を作る母を真似

トーテムポールで記念撮影

震災の街に復興宝くじ

ごみ捨つるにも鬼を気にする

湯治場に客の袖引く雪女

マツチ燃えつくまでの恍惚

心中は天城山にて果てしかや

廻り舞台に鉦太鼓打ち

思ひきりやってみました逆上り

泡立草のきりもなく生へ

月皓々酒造の蔵の壁白く

ナウ

味が自慢の鮭のムニエル

工房に蹴轆轡踏めば時鳥

緑石さがす旅に加はる

駐車して軽き寢覚に父の夢

雛流しの川のゆるやか

花散りつ弘前城の篝燃ゆ

かたびら雪に長靴のひと

平成八年七月十七日 首尾
於 芭蕉記念館

彌 敏 麻 男 同 代 敏 同 彌 糸 代 麻 男 敏 麻 男 代 麻

片 蔭

片蔭に佇つ女ありて微笑みぬ

透綾素肌に塗りの駒下駄

ポスターのビールジョッキはしたたらん

インターネットにグルメ宿問ひ

里人も知らぬ山の名月上る

二百十日はこともなくすみ

秋深し湾岸道路一直線

解散近き噂ちらほら

地獄耳鼻の利くのは親譲り

サファイアブルー瞳もつ犬

皇室の装飾品の御用達

恋に朽ちなん君ぞ惜しける

月著しくっさめの背さすられつ

隣の歳暮またも預かり

煎り立ての煮干海老反りに折れて

石原裕ちゃん小説の種

咲き際も散り際も良き花大樹

プラスバンドが風光る中

中 川

哲 捌

中 川 哲

式 田 和

近 藤 蕉 肝

日 高 玲

久 保 庸 子

篠 原 達 子

萩 原 てる子

和

庸

玲

肝

和

て

達

同

庸

和

達

初^オ虹に向けて舳先を定めたり

充電と言ひ飛ぶ欧羅巴

土地土地の酒飲み比べ議論果つ

横断歩道に掏摸のファミリィ

黴臭き説教垂れる八字髭

早く帰れと烏かしまし

黒板塀くぐり戸の棧開けづらく

はげかかったる白粉の跡

切に追はれ寝る間も呉れぬまま

夢にうなさる泥沼の月

蓑虫に父よ母よと唱へられ

ベカンベ祭アイヌ輪になり

元旦^{オウ}のカラー写真にわれも居て

俺は早飯お前級長

俊足の盗塁王とはやさるる

細螺の箱にたまる切り抜き

花便り傘寿の翁すこやかに

一番茶摘み古九谷の碗

玲 哲 て 庸 達 肝 庸 て 玲 肝 哲 和 玲 達 玲 肝 庸 肝

平成八年七月十七日 首尾
於 猫蓑会・深川芭蕉庵

荒南風の

荒南風の島や古びし船着場

青光する鯖の箱詰

飾り棚カットグラスを並べゐて

間違ひ電話二回三回

窓際に月を見てゐる縫ひぐるみ

体育の日を待ちかねる吾子

初^{ハツ}猟の銃の感触たしかむる

ダイエットして減りしふところ

妻よりも総て知ってる社長秘書

長い髪の毛探す助手席

縄文の遺跡に美女のミイラ出づ

腸捻転で終る国会

凍てし月喰べつ歩きつ中華鰻

狐の衿巻首は後に

大舞台名題役者の連ねなり

極太ペンでサインローマ字

願はくば花追人の旅をせん

山うらうらと眉はきのごと

中田あかり 捌

中田あかり

原田千町

橘文子

豊田好敏

神谷安子

町子

文子

安子

町子

文子

敏子

同子

文子

町子

文子

敏子

同子

町子

老 鶯

橋野代々子 捌

鎌倉や老鶯のいづくより

麦の穂わたる心地良き風

婦省子の一間廊下に横臥して

学術書棚並ぶ漫画も

月更けてパイプ磨きに余念なく

口に転がす干栗の粒

蔵^ウの中新酒の出来に杜氏笑む

シヨパン奏でるオートメーション

魔術師と噂の男に言ひ寄れば

束の間に知る愛の煉獄

首相選和平遠のくイスラエル

駱駝の瘤の間に跨がる

不寝番月光浴びて眠りこけ

粥も煮えたぞ十夜念仏

ローカル線物々交換賑やかで

上場広告剥がれ落ちさう

花に雨行こかもどろか借りる軒

春炬燵には細腰の粋

橋野代子
豊田好敏
浅賀淑代
小原正子
橘文子
加藤道子
蒲原志げ子
本田弥生

文淑 道淑 生淑 正敏 げ敏 げ敏 文

ボートレース鋼の腕揃ひたる

メガホンを持つ奴は誰だい

研修の「いらっしゃいませ」四十度

おまけ蒐集病膏盲

宵祭笛も太鼓もとうしろう

晒鯨が皿にちよっぴり

助教授の定年まぢか助が外れ

遺跡のミイラみんな美女なり

たっぷりの香油エステで夢心地

深き緑のいや増せる玉

座り艶茶房の椅子で月迎へ

未来語りつ叩く溢蛟

ナウ
同期会出席者減りそぞろ寒

記念切手は品切れとなる

前衛書筆と箒と見誤り

ジャンケンポンはグーで勝ちたり

旅の刻花の大樹にめぐり逢ひ

岐れ道には忘れし風

平成八年六月五日 首尾
於 鎌倉 おんめ様

道 敏 げ 文 敏 道 敏 文 敏 生 正 代 道 淑 生 正 代 正

雪解川

八角澄子捌

滔々と海へ急げり雪解川

やまあららぎの咲き初むる谿

籬の間に幼き容の集ふらん

お留守番よと猫を撫でやる

月中天流星須臾の矢を放ち

ドライブスルーしまふやや寒

四国路を隈なく巡る秋遍路

白衣が素敵無雑作に着る

聴診器ハートに触れて燃えあがり

スピーカーより低くバラード

迷惑な早起人間鶏起こす

朝の茶の湯の露地を掃く月

百論の出でて汗かくPTA

体育部長あれは鬘よ

自転車の乗り捨て多き駅の裏

小豆煮る香のただようてくる

大甕にどさりと活けし年の花

筆始には夢の一文子

八角澄子
篠原達子
雑賀遊
上月淳子
佐古英子
峯田政志
副島久美子

淳志久遊志淳達久達淳達淳英

ナオ

マンモスの親子の化石掘り出され

縁なし眼鏡教授助教授

才長けし妻を娶りし不倖せ

ほろと苦いかハイテクの酒

何とでも言つて下され雨蛙

住専食つた奴に鉄拳

男ぶり赤井なにがし売れっこに

恋の予感に弾むシュプール

抱かれて七つ下とは知らざりし

弁天まつる島の婆達

御神火のたなびくはたて月上る

背戸のあたりですだく鈴虫

ゐのこづちつけてイーゼルたたみ^{ナウ}をり

フローレンスに語学留学

当り籤誰も名乗らず国庫入り

ごんずいばかり釣れる岩かげ

名城の狭間より見ゆ花の陣

新調の靴からき清明

平成八年一月三十一日 首尾
於 行船公園源心庵

同 久 達 遊 淳 志 英 遊 久 淳 遊 久 達 澄 志

黄落期

原田千町捌

あっぱれな鍊金術や黄落期

鴉の帰る山の夕月

ひと肌に到来の酒温めて

矢立を借りて一句献上

玉砂利に止まる外車の音静か

蛙つかまへ逃げてゆく子等

復活祭チーズを入れた麵麴を焼き

罪より深き愛を知る春

妹と言って育ちし仕舞屋に

大型ファックス粗大ゴミなり

比例区の下駄を履かせて当選す

人形遣ひ荒事の汗

白糸の滝にかかりて月織し

前の差し歯がまたぼろと落ち

アテンション国際線で掏摸の旅

BGMに笙と箏

花嫁に九尾を見しとささやかれ

頬に霰のあたる篠原

原田千町捌
坂本孝子
豊田好敏
八角澄子
山口みづゑ
椿紀子

澄紀敏孝紀あ孝澄敏紀孝敏子

出初め式梯子より世を逆しまに^{ナホ}

咩の仁王に阿の仁王さん

執刀の外科医でつねに綿のシャツ

逃亡犯は拳銃を捨て

吐魯藩の砂漠に熱き風の紋

黒くとりとたまる珈琲

ほんとうにじれったいねえこのひとは

奥様の秘事もらす童僕

指揮棒につれてフィガロの二重唱

夜ともなれば郷に書く文

満月の海に珊瑚の産卵す

笑みさはやかに決まるドラフト

明治節同窓会に杖を曳き^{ナウ}

喫煙癖をきっぱりと断つ

雪国の男は鯉に夢をかけ

やうやくゆるむ薄氷の橋

発掘の銅鐸に花降りかかり

宗因の忌におろす唐墨

平成八年十一月一日 首尾
於 俳句文学館

孝 敏 孝 紀 孝 澄 紀 敏 同 孝 同 澄 町 久

立 春 や

立春や芭蕉稲荷に豆こぼれ

垣のかたへに咲きそめし梅

観潮船デッキに人の群がりて

シャンパングラス配られてくる

玻璃越しに大きな月が尾根の上

茹でしおくらの糸のきらきら

新涼の衿ゆるやかに単帯^ッ

涙もろくて惚れやすき女

アトリエと騙し通はす七丁目

京の干菓子のとりのりの色

煤竹の茶杓の裏に銘のあり

汲める噴井に月のくだけて

峰雲に得たる楽想砂に書く

ラブラドールに牽かれゆく人

ボランティア宮妃の白きトレーナー

五つ子ちゃんに心のみぬ

花霞見下ろしてゐる観覧車

礫のごとく雲雀落ちゆく

東

郁 子 捌

東 郁 子

鈴 木 千 恵 子

大 窪 瑞 枝

浅 賀 淑 代

杉 内 徒 司

倉 本 路 子

恵 枝

代 恵

同 恵

恵 枝

司 枝

代 枝

枝 恵

恵 路

恵 枝

路 恵

恵 枝

恵 路

雖^{ナオ}の眉描くはこの家の主なり

パソコン持たずウインドウズ買ふ

取り戻す筈のパチンコまた負けて

熊野の護符の腰痛に効く

枯木灘日本の母のたくましき

ゴールキーパー逆転の守備

人妻を盗まれたのか盗んだか

隠れ住んでる巴里の屋根裏

大統領核実験で名を残し

夢醒まされし深海の魚

獺祭忌手擦れの蔵書月照らす

忘れたことを忘るうそ寒^{ナウ}

故郷はいまどぶろくを醸す頃

週末なれば誘ふジョギング

記念写真両手で造るVサイン

有線流す曲の変れる

幻の淡墨の花ここに咲く

蜂を払ひてたたむうすべり

平成八年二月四日
於 江東区芭蕉記念館

枝 郁 枝 路 同 代 路 代 恵 同 路 恵 枝 同 恵 代 恵 路

予感と化学式

日高 英二 捌

萩の原ゆけば宴の予感かな

秋繭のいと紡ぎ初む家

オーボエに誘はれ後の月出でて

小さき絵皿に空を飛ぶ騎士

人工の浜に氷菓をひさぐらん

号令一下裸子の駆け

停戦^ッのあの日に借りた望遠鏡

跳橋上がれば妻の饒舌

呼出の口実ハイネの「歌の本」

映画街には恐喝^{おどろ}が増え

ばりばりと草加煎餅大袋

帽子外套網棚の上

塾帰り連立ち帰る暮れの月

綾取りの間も宇宙ふくらむ

骨折の脚にギブスのETが

ロバの背中の教理問答

忽然と花消えてゐる昼下がり

黄塵万丈いづくより来る

佛 日 上 浅 近 椿
 瀧 高 野 賀 藤
 健 遊 淑 守 紀

悟 玲 馬 代 子 悟 馬 代 男 馬 子 馬 悟 子

蝶^オ愛づる賞金稼ぎのショットガン

鍼力の風呂の湯加減をきく

家康がお代りしたる味噌雑炊

化学式にはNがいっぱい

オリンピック予想通りの結果なり

寄書の句に季語を忘れて

魔女狩を免れ場末の高窓に

小石を投げる駈落ちの刻

がちがちと空調口で接吻を

餌を食へない金絲雀の鬱

月蒼し言霊を吊る一枝欲し

タラの大地に綿の吹くころ

落^オ鮎に逢はんと急ぐオートバイ

革の袋に新しき酒

目覚むればとうとうたらし翁舞ふ

まほろば博は香具山の裾

投げつけて己が浴びる花つぶて

臍の卓にフラスコを置く

平成八年八月十二日 首尾
於 アトリエ・F

英

男 代 子 馬 男 悟 代 馬 玲 悟 代 馬 子 同 二 代

裏町に

裏町に続く原野や猫の恋

火焰土器掘る窪の蒲公英

油南風舐先の椅子に寝転びて

鷗の攫う皿のパン屑

鋭角にシュートを決める宵月夜

受話器の奥の故郷の秋

面接に恨みを遺すそぞろ寒

四こま漫画で自叙伝を描く

手作りの翼で崖を滑り落ち

質^ち精悍なナースなりけり

逢見ての後の思ひに脈をとる

折り敷く草の乱れ知られず

市街区に砲火鳴り止む夏の月

ただほととぎす急ぐ暁

白波の儲け仕事にひそひそと

表裏の区別つかぬ反物

永き日をルーペに覗く花図鑑

種痘の痕も新しき子等

両吟

日 日
高 高
英 玲
二

オキ

復活祭歌弥撒の声晴れやかに

遊牧民が建てたマンション

二十年駱駝を曳いて水を売り

仇を刺して消えた俠客

パチプロの母を訪ねて玉子酒

塩鮭の背に塩の吹出す

空港に帰任の鞆置き忘れ

我発見す金の落髪

愛しさに壁伝うらん命綱

タイムトンネル蜜の大地へ

月まどか弥勒を仰ぎ奉る

木の実勧むる小さき尼御前

揺籃オウの夢の記憶か残る菊

同じ所で止まるレコード

運命が樫の扉に寄り掛る

雪崩るる嶺の岩が根を往け

足元の湧水を汲む花の奥

弓なり跳ねる瀬々の若鮎

平成八年三月二十三日 起首

平成八年十月十七日 満尾

於 アトリエ・F

去来かな

文 音

霜月は煙管掃除の去来かな

しづかに煮ゆる埋火の鍋

スケボーに興ずる子らに声かけて

ペンキを塗りしバス停に立つ

高階の玻璃きらめかす望の影

製図机に活ける穂薄

先輩に五日置かせて走り蕎麦

女弁護士辣腕で鳴り

愛情線ひとりの時に確かめる

恋人の名をつけしカナリヤ

黒マントマジシャンお辞儀深々と

にこりともせぬ呆けの父親

遠泳の太鼓の響く月の浜

ひやとビールで席が分かれる

転勤にあれは左遷の噂あり

預かる犬は無芸大食

養花天きのふの夕刊また読んで

ワープロ打てば山の笑ふか

百武冬乃
佛 洵 健 悟

す

古井戸の端に来てゐるしじみ蝶

語りつくせぬ開拓の夢

教場で短軀の決めし背負ひ投げ

義により結ぶ兄弟の縁

シチリアの海きらきらとたゆたひて

真白き椅子の並ぶビストロ

咳をする乞食どこかで見たやうな

霊のお告げで初枕する

かきやれば前髪をつやかぐはしく

ただ一心に廻す蹴ろくろ

仰ぎたる月は昨日の残りもの

出水の跡のしるき草むら

ち

高啼きに島のいで湯を守る鵲

公達めきて弥宜の腰つき

戯れによろへる武具のずっしりと

アンティークショップはしごする春

看護婦の同期さざめく花の庭

芝も小径もなべてかげらふ

乃 悟

平成六年十一月二十二日 起首
平成八年七月十日 満尾

秋 薔 薇

佛 洵
健 悟
捌

訪へば野分話も梅ヶ丘

ととのはぬまま秋の薔薇垣

十七夜舞曲の想の泛びきて

虚のコップに透かしみる時

溜り場に新流行の兆しつつ

夏期講習へぬける近道

沢蟹^ッの高足立ちて雲を呼ぶ

尻の腫れ物婆だけに見せ

若武者は鎧ふ重さに死に遅れ

天満宮に千句納める

火男の面をおろせばフィリピーナ

スピード籤を胸の谷間に

雨の日は暇ねとB型同志言ひ

寒犬群れて遠き銃声

乞食の旅に忘れぬ電話帳

片口に注ぐ酒をいただき

笹舟はよるべなく揺れ花ふぶき

春満月に申し合はせる

権 頭 和
日 高 淑
浅 賀 二
日 英
佛 洵 健 悟
近 藤 守

弥 玲 代 男 弥 二 玲 男 弥 男 悟 二 代 玲 弥 男 代 悟 玲 代 男 弥

ナオ
渝越の祭せはしく髪を結ふ

オルフェの聲の響く地下街

つかまらぬ〇一五七迷ひ菌

宇宙船にて輪回しをする

甲比丹の沓が踏んでるガムの端

老いたインコがタダイマといふ

密林に独身寮のすくと建つ

黒き柔肌ぬめる蚊帳ぬち

マニユアルの通りに恋をして飽かず

落書をする平賀源内

行く秋のうだつを統べる猫であり

オウ
ひと筋に洩る節穴の月

正座して青蜜柑剥く夜のしじま

延長の果一打さよなら

退官の階段教室人溢れ

ラジコン機にはパパの名前が

珈琲の香たゆたふ花明り

黄金週間眠り足りたる

平成八年九月二十四日 首尾

於 世田谷梅ヶ丘アトリエ・F

代 玲 弥 代 男 二 同 弥 代 男 二 男 代 玲 弥 玲 代

濡れ女たつ逗子のトンネル

講釈師見て来たような嘘づくり

うだる暑さに端折る唐棧

おねだりはダイヤにしてね膝枕

奥の手出して野郎腎虚に

残る虫草の茎へとへばりつき

山清らかに落人の墓

少年の夢は五輪の旗の下

松明かかげ走れモンゴル

七日月子午線交る点にあり

元祖に本家紅葉饅頭

ナウ
鹿寄せの投縄ひゅうと技競ふ

厚生官僚叙勲御辞退

処生訓ちやらんぽらの運まかせ

禁煙つらししやぼん玉吹く

急流の河面に映ゆる花大樹

琴彈鳥にしなふ細枝

平成八年十月二日 首尾
於 鎌倉 おんめ様

敏 生 文 げ 敏 る 文 哲 げ 同 文 敏 哲 文 る 哲 る 哲

秋小寒

松本

碧捌

秋小寒鈴懸の実を拾ひけり

夕月淡き背戸の細道

酌みかはすうるかを客にもてなして

座も賑やかに児らのトランプ

当り籤見れば数字の読み違ひ

ただで団扇を配る売り出し

中村屋本水使ふ夏芝居

女子大生に流行るおっかけ

このへんで帰って頂戴あとはまた

領海侵犯波高くなる

混線の無線で他社の情報通

納めのコンペ50切りたし

枯木立藁をまとひて月明り

笠深々と托鉢の僧

サラエボの街に観光ツアー団

通訳しつつ煙草ぶかぶか

うららかに幼き夢の花電車

乳母日傘は蝶の文様

松田 義夫

式田 和子

中川 哲

松本 碧

鈴木 美奈子

豊田 好敏

式田 恭子

哲

敏

奈夫

恭

和

哲

敏

奈

和

メーデーの戰士古傷痛むてふ

歌声喫茶地下に復活

真打になつても司会専門で

干した褌濡らす夕立

裾からげどぶ板ひよいと飛ぶ女房

頬ずりしたい猫となま足

王妃からボデイガードは離縁され

俺ホームレス怖いものなし

湯たんぼの低温やけど長びきて

千金かけし倅藪医者

マンションの月の宴は癩祭忌

鬼灯鳴らす老妓駒下駄

泣かないで生きた人生身に入みて

日本国じゅう廻る絵手紙

リサイクルいま先端の業界も

春泥黒く有機農法

大鳥居くぐれば借景花の山

全輪駆動囀りの中

*素足

平成八年十月八日 首尾
於 渋谷連句教室

恭 碧 哲 奈 夫 和 恭 敏 夫 奈 哲 碧 和 哲 夫 哲 恭 夫

螺鈿の琵琶

本屋 良子 捌

天平の螺鈿の琵琶に秋惜しむ
 豊の上に織き月影

とり囲む子らに螳螂斧あけて

割ってこぼしたポテトチップス

清掃の奉仕に汗をひた流す

小川に洗ふ瓜の一顆を

青い目の尼僧の話す飛驒訛り

エアームルのなぜか親展

忘れたい忘れたくないあの場面

鬼籍の彼のかぶる角帽

早慶戦ばんから声の応援歌

胃の腑を通る熱きコーヒー

夕弥撒の果ててつきくる寒の月

鏡の中に沈む木枯

戦争の体験ると書きつづる

ゆっくり渡る村の吊橋

牛啼いて分教場の花吹雪

てんでに遊ぶ紙の風船

本屋良子
 船渡文子
 竹内昭子
 川治敦子
 井口ひろ
 松村あや
 園部志げ
 成瀬貞子
 堀内洋子

文子 貞ろ 貞や げ昭 や 貞や 洋

返し針して春の炉に晴着縫ふ^ナ

となり建ちし鉄筋の家

舅より「脳内革命」おくり来る

火花を散らすディベートの卓

神酒に酔ひあばれ御輿が軒こはす

裸男に心うばはれ

肋骨の折れんばかりに抱かれて

ベートーベンを聴く岩田帯

こんこんと湧く水みたす大さ羹

片脚たてて鷺のたたずむ

居待月残留孤児の深き皺

今年穫れたる黒米の味

さはやかに校正すすむ発句集^ま

旅の土産の塗物の匙

北国の職人の町しづもりて

古き板塀のぞき穴あり

高結ひの髪が過ぎゆく花の径

元気に育て放つ若鮎

平成八年十一月五日

於 岐阜市華陽公民館

洋 良 文 敦 昭 貞 げ ろ 敦 げ 貞 や ろ 文 昭 洋 敦 文

山口 美恵 捌

ポケットに小鳥の卵温めつ

この宝物誰にあげよう

堅物は表向きなり手八丁

認知迫られ逃げまどふ父

ホテルをば終の棲家とあきらめて

朔太郎忌の暁方の夢

沢蟹の岩から岩へ横伝ひ

携帯電話吊橋の上

犯人の要求吞めばきりも無く

片膝たてて大見得を切り

月の下赤き火を噴くベスビオス

十字架祭静かなる空

牧閉す老いし農夫は耳遠く

座敷童子とかくれんぼする

ビッグハット五輪準備も整ひて

卒業記念写真交換

掃き清めまだ肩にあり花の雨

インターネット春炬燵から

生田目 常

義 恵 敏 英 義 雅 樹 碧 敏 英 碧 樹 雅 敏 碧 英 義 敏

平成八年十一月二十一日 首尾
於 築地電通南寮

良夜

山崎一恵捌

声明のみ山に流る良夜かな

穂薄どさと活けし大甕

火を細め榎植のジャムを煮詰めゐて

封も切らずに捨てゐる広告

寶石の展示会場賑やかに

懷までも冷やすクーラー

雨もよひ緋鯉跳ねたる池の面

頬を染めつつ上着預かり

好き好きと書いては消して又書いて

古き土蔵に脱サラで住む

こだはって選ぶ地ワイン客を呼び

鷺鳥の肝と蝶鮫の卵

凍雪を分けてかすかな月昇り

影絵遊びの子らのお相手

やうやうに〇157解除きく

竹踏みをして元氣回復

大垣の川灯台に花吹雪

後先になり陽炎の徑

山崎一恵
上月淳子
青木泉子
豊田好敏
須田智恵
梅田安利
神谷安子

同智安利同淳敏淳利安敏子子恵敏子子恵

若きデウスは悪戯が好き

いつの間におんぶお化けに取り付かれ

解散選挙えいと決めたる

蝙蝠の飛ぶ縄張りは三角形

旦那檜葉の木わたしや凌霄

黒髪が腕にまつはる長枕

引越塵芥にネガの混じりて

町並を睥睨してゐる櫓門

尉のひとり寝古き長椅子

来世紀月への旅を予約する

理科学生と増やす邯鄲

ハロイーンの南瓜の面が売れに売れ

アイデア勝負はやる漫画家

一球入魂引き継ぐ野茂の厳しさよ

隣近所に挨拶をする

いっせいに花咲き初めし青き空

ふらこち揺るる小さき公園

平成八年九月二十七日 首尾
於 源心庵

泉惠安敏智利智安泉安泉淳泉敏利智敏利

はぐくみしもの

由川 慶子 捌

はぐくみしものの息吹や春の星
母性さながら黄水仙立つ
麗けしライ麦のパン焼き上げて
なつかしき友まじる語らい
夕月夜らんぷいつしか灯さるる
落葉ひらひら公園の椅子
三河路に人の往来とろろ汁
夫とデートの想い出の町
打ち明けてほんのり染まる頬の紅
躓きの石起き上りの石
風そよぐ鎮守の杜の鶏の声
うわさ話に刻を忘れて
ゴンドラで巡る川面に夏の月
自分史にまた加う一行
祝宴の皿は当地の衣焼き
味噌のつまみでいいという人
五分咲きの花で終るも面白く
風船ふわり雲間がくれに

矢崎 藍
柿本 時代
後藤 志津枝
宮田 昭三
宮田 喜代子
螺沢 のり
月山 壹
加藤 治子
森佳子
繁原 敏子
片山 和子
原 みね子
稲田 千寿
大庭 稚子
由川 慶子
稲垣 渥子

ナオ

沖繩に父祖の地守りて鐘供養

食後の薬ずらり並べる

景気よく大声あげて叩き売り

営業課長も今やリストラ

屑籠の紙のかそけき音も冬

南蛮漬の臭いしみくる

年下の夫の靴下繕いつ

耳打ちをする影の重なり

もう会わないもう会えないと帰り道

隣接休耕地雨の近づく

立ち並ぶビルに閉され月も無し

紙に切られし秋陰の指

ナウ

囚われの小鳥を空に放ちやる

錆びたる線路西へ西へと

薄氷のすきまをえらび魚およぐ

双葉はつかに芽ぶきせし頃

かなしみが透きとおるゆく花の下

迷子の蝶を待ちて久しき

平成八年三月二十九日 首尾
於 スペース K E I

長坂節子
小園好代

八木聖子
藍子

月山富佐子
寿

女
聖
慶

◆
源

心

◆

狭霧霽れ

狭霧霽れサハリン望む岬かな

怒涛の果に浮かぶ待宵

秋桜玻璃の器に飾られて

レシビ通りにシュウの皮焼く

年越^ッの袂祝詞のひびくらん

つらら振り上げちゃんばらの子等

総選挙妻の内助ですべりこみ

回数券で通ふ妾宅

学園都市单身赴任老教授

籐の寝椅子で夢をむさぼり

呑ん兵衛に昔なかった休肝日

雀が鴉囓ふ城跡

外っ国の人混へて花宴

茶摘ツアーは予約電話で

神谷 安子 捌

神谷 安子

副島 久美子

木村 真呂

島村 暁巳

久

巳

久

巳

呂

同

久

同

呂

巳

原^すっぱで絵風字風が縫れ合ひ

宗教紛争絶えることなく

殺虫剤まけども消えぬ奴がゐて

甘やかし過ぎヒマヤン猫

月昇る父の日の父照れてをり

赤禪きりり泳ぐ大利根

三十路坂数へ切れない見合歴

逃がさじものと体すり寄せ

木枯のビルの谷間の吹き溜り

何でも在りのこの国の果

中年^ちが又読み返すどらえもん

正座苦手のお茶の弟子達

花明かりしだれて美しき念佛寺

弥生の小径歌ひつつゆく

平成八年十月九日 首尾

於 池袋 滝沢

久 巳 同 久 巳 呂 久 巳 呂 巳 久 呂 巳 久 同 巳 久

蘭麝香

秋興や庵主馳走の蘭麝香

淡き夕月邯鄲の声

山脈の遠のくばかり牧閉ぢて

ウエスタンブーツ磨くひととき

暖房の程々によしキルト展

雪焼の痕残る乙女ら

柔らかき訛をこぼす紅き唇

セクハラ保険企画中なり

誘拐の現地社長にドルを積み

円座を組みて麦酒飲み干す

河船に寄りくる鷗さわがしく

土産物屋のピカピカの玻璃

地図の上花前線を描きみる

お遍路参り支度整ふ

木村 真呂 捌

木村 真呂

峯田 政志

副島 久美子

山口 美恵

久

志

恵

久

同

恵

志

久

同

志

春浅し

倉本路子 捌

春浅し鳩の乗りくるローカル線

薄氷踏みつ登校の子等

こまやかに青鰻の味噌ねりあげて

軽きリズムを流すCD

バイロンの詩集にあそぶ月の光^ッゲ

出展近き蘭に水やる

秋拾母の形見の躑とり

小石川から千駄木へ嫁く

あてはづれ新婚早々午前様

異常低温つづく天気図

核実験終へし途端の平和主義

念入りに拭くショートアイアン

高層のビルに開きし大花火

酌み交はす酒きゅんと冷えたる

倉本路子

上月淳子

大窪瑞枝

金久保淑子

篠原達子

島村暁巳

須田智恵

枝

淳

巳

枝

達

淑

淳

監督のまた駄目を出す立稽古^{ナオ}

からかさ小僧ひょいと覗きぬ

お隣が空き家になって十余年

そろそろと這ふ冬蜂を追ふ

雪かきの司祭につこり腰のばし

恋のヨーデルアルプスを越ゆ

艶聞もホモの噂も抱いて逝き

英雄一代芸も一代

満月にかざす明鏡止水の刀

木の葉山女のくだり待ちつつ

蛤^{ナウ}になるぞ浜辺の雀ども

みんな嬉しいシルバーのパス

しだれ咲く醍醐寺の花掌にうけぬ

夢を包んであがる風船

平成八年二月二十八日 首尾
於 ホテル ニュー神田

枝 淳 達 巳 惠 同 淑 同 枝 惠 淳 達 巳

草の実の

草の実の飛んで縁切寺近し

別れ鴉の鳴ける夕月

秋闌くるクルージングに遊ぶらん

ブリッジ仲間囲むテーブル

炬燵猫やをら起き出し大欠伸

着ぶくれのなか嘘で固めて

すぐ口説くミラノ生まれの色男

ツインベッドのお隣は空

見捨てられさがけ新党どこへ行く

古茶すてがたき走り茶の頃

子守唄きかせる方が眠くなり

在宅勤務ワープロの音

花の屑ぱくりと鯉は池の主

止めし車に積もる春塵

篠原 達子 捌

篠原 達子

原田 千町

梅田 利子

副島 久美子

佐古 英子

美

町

同

利

美

英

美

利

町

陽炎に揺れつベドウィン族の現れ

喉をうるほすカナートの水

気がつけば己が掘ったる穴の底

救ふ神あり捨てゐる神あり

それぞれの軀に枕とりかへて

惚れた弱みで浮気見過ごす

雪女愛して溶けて消えました

眉唾物の床の歌麿

聞し召す月を肴に夏の宿

青嶺はるかに故郷を想ひぬ

生命保険二重三重かけまくり

倅はF I レーサーとなる

天守へといく曲りして花の風

蜜のしたたる養蜂の箱

平成八年八月二十八日 首尾

於 淡路町 ホテルニュー神田

同 利 達 町 英 同 町 利 英 同 町 美 同 町 達 英

トーテムポール

副島久美子 捌

トーテムポールバンクーパーは風の秋

つぼむ竜胆宵の月影

新走今年の出来を確めて

家族揃って豆腐好きなり

に^ッほどの思はぬ方に顔を出し

寒中見舞ふ地元代議士

黄楊の櫛土産に貰ひきよとんとす

幼の妻は大事大事に

古書典籍伏字ばかりの媚薬篇

インターネット冷房の部屋

基地を問ふ賛否両論地主どち

張子の虎の首がぐらつき

横笛の音色のびやか花開く

茶摘に励む海近き里

副島久美子

峯田政志

須田智恵

島村暁巳

智

志

同

智

巳

志

巳

同

智

巳

山笑ふ交代で駆るレンタカー

登窯いま炎たけりぬ

鑑定士家宝に付ける低価格

おかめの私勝負中味で

摘み喰ひ逃げる男に豆を打ち

カーテンコール拍手喝采

大伯父はフリーターのまま老の坂

鮎の釣場を総なめにする

月渡る塵ひとつなき夏座敷

立原文学絶版もあり

持病とは仲良く煙草も少しだけ

正座の時に使ふ小道具

花に触れジャングルジムの吾子得意

誰にも知れず育つ蜂の巣

平成八年九月十一日 首尾

於 滝沢

志 智 同 久 已 志 同 久 已 智 同 久 已

◇
二十
韻
◇

上る月

久保田庸子 捌

日の匂ひ菜畑に消え上る月

久保田 庸子

からす蒔に帰るやや寒

東 郁子

運動会仮装の衣裳ととのへて

梅 田 利子

砂糖多めに淹れるコーヒー

五十嵐 譲介

か^ッかり来る電話は解せぬ外国語

郁 介

超氷河期の女子の就職

介

猫好きと犬好きの人氣が合はず

利

嘘八百のリップサービス

同

霧笛鳴るエリザベス号夢の旅

郁

明易の丘白き神殿

介

岩穴に名人醸す密造酒ナホ

灰皿置くも拘りのありこたは

ホームページ嫁さん募集を切り札に

スピードジャック嗤ふ凍て月

濡れ落葉第九に命かくるらん

螺旋階段足を滑らせ

駆け込みでマンションやっとな手に入れるナウ

「春の踊り」を子らが練習

花の山局の墓を鎮ませつ

かぎろひの立つ大和国原

平成八年十月十三日 首尾
於 光ヶ丘近隣センター

利 庸 介 利 郁 同 利 介 庸 郁

北 風

五味 蓉子 捌

髪さらひ魂をさらひて北風

残る紅葉のあざらけき苑

遠くより子を呼ぶ声の響くらん

靴履かせれば踊るパペット

織^ウ月のアルハンブラの空にあり

桃の実熟れに熟れたる頃に

制服の乙女より受く愛の羽根

交換日記ひらく屋上

船唄は薄暑の川をのぼりゆき

黒糖アイスばばさまが売る

五味 蓉子

八代 嫺

村田 富美

浅賀 淑代

美

代

嫺

同

代

美

縄文のリビングルームか謎のまま

漢和辞典に探す鑿の字

独り居に天動説の星の冴え

樽酒を抜く凍港の月

塩の道忠兵衛さんと手を取りて

寂聴庵の扉閉ざされ

比例区に力士の夢の叶ひたる

蜜蜂を追ふ父母の村

機影過ぎ静けさ戻る花の山

望遠レンズに遠足の列

平成八年十一月九日 首尾

於 東郷神社社務所

代 同 美 嬬 美 代 嬬 子 嬬 代

落花繽紛

武蔵野や落花繽紛夢ごち

お下げ三つ編遊ぶぶらんこ

戸を閉し浅蜷つぶやく厨辺に

餌を待ちかね耳さとき猫

レオタード拭へる汗に青き月

ムーランルージュの恋明易し

来る来ない占ひの賽吉と出る

住専国会議員動員

鉄拳2発売日には売り切れて

お名指しで買ふ名代鯛焼

権頭 和弥 捌

式田 和子

権頭 和弥

村田 富美

高橋 豊美

吉村 ゑみ子

浅賀 淑代

五味 蓉子

和

豊

蓉

福笹ナサを負うてさやさや宵戎

ジバングの旅タンカーが好き

あの時のワインの味を忘れかね

同棲生活やや寒の頃

霜降の月「火の鳥」を読み耽る

遣るには惜しき細工虫籠

ブルーブルータスお前も胃痛に悩むのか

鏡に鏡映る永遠

札所寺蓮華躑躅の真っ盛り

友と集へば笑ふ山々

平成八年四月十四日 首尾
於 小金井公民館緑分館

ゑ 弥 富 蓉 和 淑 豊 富 淑 ゑ

岩瘦せて

佐藤 良彌 捌

岩瘦せて秋の潮の高鳴れり

なぞへの畑に菜種蒔く海女

広縁に月の出を待つ人ならん

パソコンのキー軽く叩きぬ

青春^ッの想ひ出の曲リクエスト

地蔵顔持ち主夫に徹する

情事果て蛇這ひ回る柔肌に

腰痛治療に励む背泳ぎ

吟醸酒ちびりちびりと夜が更ける

中近東のまたもさわがし

久保田 庸子

下 鉢 清子

橋 本 京子

五十嵐 讓介

庸

清

佐藤 良彌

介

京

庸

連山^{ナオ}の襷の幾筋くつきりと

刀きたへる鍛冶の槌音

三毛猫の欠伸をしほに一服す

押しくら鰻頭ふれしふくらみ

月の窓鴛鴦の契りのごときキス

カード入れば銭がでてくる

村^{ナウ}おこし夢の温泉掘りつづけ

弁天堂に積る春雪

薄墨の齡重ねつ花大樹

子供が遊ぶ陽炎のなか

平成八年九月八日 首尾
於 光ヶ丘近隣センター

清 介 清 介 同 彌 京 庸 同 彌 京

蔦紅葉

須田 智恵 捌

秩父路に残る旅籠や蔦紅葉

これはこれとは猿酒の月

夜長しシンセサイザー響かせて

双児の名まで似たり寄ったり

垣根^{カキ}ごしおすそ分けよと人形焼

バス停近くくつ屋開店

びったりと同じ時間に通るひと

梅雨雷に抱きつかれる

恋すれば蛇の寝蓐^{カマ}も金の閨

ごみ捨役は親爺殿なり

須田 智恵

篠原 達子

八角 澄子

今宮 水壺

山崎 一恵

達

恵

壺

澄

恵

四書五經またある時は水滸^{ナホ}伝

三峽下り權さばきよき

果てもなき人間模様まのあたり

王子の不倫にくしダイアナ

月昇り肩寄せ合うて冬野道

寺の辺りに田鳧群がる

頃^{ナウ}もよし賭場開帳の木魚打ち

エープリルフル誰も気づかず

甲子園胴上げ続く花吹雪

長電話して春の暮れ行く

平成八年十月三十日 首尾
於 ホテルニュー神田

壺 澄 達 惠 同 澄 達 澄 壺

螢袋

高瀬 美保 捌

水疾し螢袋の崖に咲く

高瀬 美保

バンガローにて読む三国志

須田 智恵

セッティングナイフとフォーク真直に

内田 麻子

あれもこれもお薦めの品

保

夕月^ッは踊り子号の窓に見え

恵

終点のなき恋のもみづる

麻

忍ぶれど誰にみせばやわが源氏

保

ひねもすうなるチェンソーの音

恵

泡の風呂足腰つけて出養生

麻

のっぺらぼうがふいに寄り添ふ

保

張り込みの刑事も時に熱燭を

ジャングルジムに大寒の月

喪の服を又取り出だし吊す夜半

再婚願望男やもめは

晴々と世界一周燕つれ

壁にルオーのキリストの像

氣^{ナウ}に入りのテーマソングをダビングし

拾ひし細螺千代紙の箱

大小の瀬戸の島々花明り

連風あげて競ふ若者

平成八年六月三十日 首尾
於 稲取エンゼル

恵 保 麻 恵 保 麻 恵 保 麻 恵

帯解や

熱田神宮奉納正式俳諧壽子執筆を祝す
帯解や執筆吟声凜然と

歌膝美しき冬浅き部屋

池水の深き藍から鯉はねて

配り余りのティッシュいっぱい

臥^う待の月に朝刊読み終へる

芸術祭に師弟連舞

菊人形モデルいつしか愛となり

どぶ板踏んで粹な女房

お金好き選挙も好きが道楽で

毛細血管少しふくらみ

武村 利子 捌

武村 利子

豊田 好敏

中川 哲

式田 和子

杉山 壽子

宮川 侑子

田部 みどり

哲

和

壽

見た目にも食欲そそる五目鮠ナオ

にんにく置いてドラキュラを避け

醜聞のクリントンまた大統領

国の威信をかけて子造り

爛酒に脱がせ脱いだるあとに月

お湯に重曹ぶくぶくと立つ

旧兵舎馬の匂ナウひが残りゐて

グランド長閑ドラフトは夢

湖北きて観音堂に花吹雪

春挽絲を紡ぐ指先

平成八年十一月十一日 首尾
於 住文北ビワコホテル

敏 和 壽 敏 哲 恍 和 利 ど 洗

初時雨

田部みどり 捌

ふたたびの龍影閣や初時雨

紅葉散り込む池のさざ波

訪ねたる友の食卓賑はひて

器用に遊ぶ子等のテトリス

ためらひの月を探してつまづきぬ

猪おどしだよ怖がっちゃだめ

恋敵と秋のまつりの笛太鼓

茶しぶに染みて欠けた湯茶碗

愛用のチューブで腰痛しかと巻き

選挙終はれば公約は反古

東 明雅

式 田 和子

中 川 哲

東 郁子

蒲 原 志げ子

豊 田 好敏

杉 山 壽子

細 川 研三

武 村 利子

宮 川 侑子

竹生島車窓の中に涼しげに

生糸の里に暑き月の出

旅ゆけば十一面の観世音

娘のやうに姑恥ぢらひて

「夜這酒」腰をぬかした男達

日曜日にはごろ寝三昧

源平の昔を今に能衣裳

背山前山囀をきく

散策の道どこまでも花明り

風船ふはり逃げてゆく空

平成八年十一月十二日 首尾
於 湖北の旅車中

鵜飼 万千子

服部 美代子

浅井 沙衣子

高木 節子

哲

壽子

田部 みどり

く の あ や

みどり

利子

梅雨明けや

塚本 泰子 捌

梅雨明けや水位を下げし山の湖

風が運べる百合の強き香

合宿の夕べオカリナ吹く子居て

ファックスで来る友の連絡

隧道^ウを出で月に逢ふ高速路

宗祇忌なれば集ふ古寺

二次会の新酒酌みつつ愛芽生え

婿いらなくて孫あればよし

駅前のホテルオーブン真近くて

モスクワ選挙病取り沙汰

塚本 泰子

五味 蓉子

内田 麻子

瀬木 志津

蓉

麻

志

泰

麻

泰

能樂師足袋の鞋に氣をつかひ

月昇る時吠ゆる狼

宇宙より帰還着地の実験場

今の若者みな醬油顔

長身の彼の影踏む異人坂

灯り消したる後の秘めごと

植物園千の鴉が夢の中

復活祭の卵ピンクに

花吹雪ドンキホーテは淋しきか

脱ぎ捨てられし春泥の靴

平成八年七月八日 首尾
於 梶ヶ谷 房連庵

麻 志 蓉 泰 志 蓉 泰 志 麻 蓉

小名木小春

中島 啓世 捌

小名木小春芭蕉桐奚舟下り

中島 啓世

今も変らぬ鴨の鳴く声

峯田 政志

煉瓦館シェフのスープの香に立ちて

内田 麻子

ビジネス手帖びらびらと繰る

坂本 孝子

きっぱりと雨上りたり望の月

秋山 志世子

抱けば露けしぬば玉の髪

椿 紀子

惚気をり野葡萄食ったその口で

孝

ごった返しの国政選挙

志世

天上のヤコブの梯子引き下ろし

紀

玉振る如きアリア朗朗

志

ナホ
白夜ゆく詩人は影を長くして

孤島の月に呷る冷酒

待ちかねし集団見合腹くだし

持参金には豚を三頭

絵を抜けて幽霊帰る山襪に

地蔵が辻に空っ風吹く

ナッ
指先の運動麻雀囲む卓

ここみを摘んで古戦場あと

訪ね来し楊貴妃桜花の精

紋白蝶の高く舞ひ翔つ

平成八年十月十六日 首尾
於 深川 芭蕉記念館

志

世 麻 志 麻

紀 同 孝 紀 志 孝

冷やし馬

両吟

冷やさるる馬を見てゐる童かな

登坂かりん

両手をあてて鳴らす草笛

今宮水壺

一本のすあま等しく切り分けて

壁の更紗のしづみたる色

月下^ッりペルシャの市場眠り落つ

ピエロが恋を秘むるうそ寒

蟪蛄の雌に食はるるわが運命^{きだめ}

ながっ尻にて酒好きの客

くり返し病歴ただす婦長さん

午^{ひる}の時報にペンをなげ出す

屋上はそこかしこもクラブ振り^{ナオ}

大川周明日記まとまる

刻の間を凍雲減るる月の影

福は内なり鬼も内なり

髭もたぬだけを取り柄ぞ山の神

Innocent Love 淡き夢かも^{マツ}

パソコンが解いてくれたる詰将棋^{オウ}

春の叙勲でつくる礼服

西国の花宰領は紀三井寺

霞む列島延びるハイウエー

平成八年八月七日 首尾

於 石神井 Cafe Colline de l'Est

ん 壺

百人町

八代

嬬捌

寒木瓜ののぞく土塀や百人町

椿 紀子

馴染そろひて冬のあたたか

岩井 啓子

カルテット弦の調節きりもなし

佐藤 良彌

椅子に爪とぐ灰色の猫

日高 英二

青道^ウ心片割月を見上げたる

八代 嬬

嫂恋うる黍の崖道

二 啓

美術展モデルをめぐるスキャンダル

二 啓

三角錐と球で処理せよ

二 啓

絶海の島に聖なる墓を守り

紀 彌

時を刻める日時計の影

彌

ダービーのダークホースにありったけ

冷でぐいっと「ピン」の酒干す

国友の懐剣秘めし葛籠底

見世物小屋に妻仇を追ひ

月冴ゆる羽あるものを焦れつつ

骨すかすかになりし関節

保守二党すそにまつはる社会党

初虹の下幸ひを訪め

薄墨の花樹木医にいやされて

浅蜷御飯の粒のふっくら

平成八年一月十三日 首尾
於 大久保地区センター

同 啓 紀 啓 紀 啓 彌 媛 二

◇ 半歌仙 ◇

秋 深 き

小園 好 捌

秋深き隣は何をする人ぞ

土間にころがる太き唐芋

一片の雲なく月は中天に

パソコン習ひ余暇を楽しむ

リサイクルショップで求めし服を着て

鉢巻をして鮎を焼く父

虫食ひのまだら模様の和綴ぢ本

看板娘と今日もおデート

三高の彼氏新車を自慢して

窓際族は肩を叩かれ

翁

月山 壹

繁原 敏 女

加藤 治 子

由川 慶 子

谷本 守 枝

壹

治

慶

枝

マネキン は身ぐるみ剥がれ納屋の中

財布 あければ小銭ばかりで

月の夜も年末闘争たけなはに

薪ストーブの炎めらめら

影法師怖くて母にしがみつ

政界引退表向きだけ

夢のごと花に埋もる城の跡

ほろと酔ひたる耳に鶯

小園

女 好 枝 好 慶 治 壹 女

平成八年九月十七日 起首
平成八年十一月二十日 満尾
於 豊田短期大学

満月

真田 光子 捌

高圧線に懸かる満月こぼれさう

真田 光子

ゑのころ草の揺るる庭先

倉本 路子

子供等のべい独楽遊びきりもなし

日 高 英 二

オニオンスープ蓋取って煮る

村田 富美

コンビニの開店のビラ配られて

路

混声合唱緑陰の窓

英

誰^ッも居ぬ茅の輪くぐりぬいくたびも

美

人には言へぬ軒かく癖

英

さよならも告げず寅さん終の旅

路

御油赤坂は松の街道

美

冬岬にんげん嫌ひの猫歩く

さしつさされつ熱爛の月

紫のマニキュアどこか悪女めき

砂漠の賭場に荒稼ぎする

R V うからやからを詰込んで

谷渡りする鶯の声

岩かげに喉をうるほす花の山

夢の一字に托す大風

光 美 路 英 同 路 英 美

平成八年十月十九日 首尾
於 新宿区赤城社会教育会館

夏座敷

谷本 守枝 捌

山も庭もうごき入るるや夏座敷

またひとしきりみんなの声

木目込の人形展を開きゐて

すれ違ひざま香のただよふ

月の暈運動会が気になる子

枝にまつはる通草色づき

住み馴れし衣の里はそぞろ寒

景気回復車売れたよ

ちよっと見がよいとてそっと手をにぎり

三児の母はいまもよろめき

翁

月山 壹

加藤 治子

小園 好

谷本 守枝

壹

治

壹

好

携帯の杖を鞆の底に入れ

癌検診も無事に終りぬ

ホームレス哲学語る冬の月

都会暮しのカラス嫌はれ

客迎へ連絡船の着くたびに

米螺壺焼酒の肴に

見上げても蹲りても花の下

ベンチの端に春の手袋

平成八年七月十六日 首尾
於 豊田短期大学

好 枝 壹 治 好 壹 治 枝

パセリ刻む

椿
紀子
捌

パセリ刻む朝小さな風の立つ

夏燕のかすめゆく窓

広やかに銅像の前掃かれゐて

ガイドブックを開く外人

長考の将棋の盤に月高し

糸瓜の水の溢れ出す瓶

鼠^ッ追ふ明神下に蚯蚓鳴き

ヨーガの極意吐く息に知る

いい齡のママさんコーラス勢揃ひ

往きも帰日も昼湯昼酒

椿
紀子

小野
シズ

五味
蓉子

古賀
一郎

ズ

同

郎

蓉

同

郎

阿呆どすえ阿呆どすよってかんにんえ

紅きゅっと引き雪女郎燃え

月光を細きみどに白磁呀ゆ

紙飛行機を何処に飛ばさう

淡々と老医師語る安楽死

おぼろに揺るる木道の端

落日は西に東は花の山

海を指さす春の手袋

同

ズ

蓉

同

ズ

紀

郎

執筆

平成八年六月八日 首尾
於 新宿大久保地区センター

賀茂祭

長崎 和代 捌

黒牛の緋房ゆさりと加茂祭

薫風かへす禰宜の広袖

外つ国の少女に席を譲られて

のり巻き弁当分けあひて食べ

薄原サイクリングが一行に

実り豊かに重き稲の穂

稿成りて月玲瓏と昇りくる

洗濯物は取り込まぬまま

泰然と羽生七冠に君臨す

野生に戻り鶏の飛び

長崎 和代

篠原 達子

倉本 路子

竹田 登代子

佐々木 有子

須田 智恵

猪瀬 侃男

橋本 妙

路

有

ヌーディストクラブが島を占領し

なにて隠さう凍てし古傷

くちづけに耳輪が揺るる寒の月

オカリナの音の何処方より

ひとり旅ホームの端の喫煙所

連風づくりに励む弟

花筏きらめく水面くづしつ

海市のたつを告ぐるサイレン

平成八年五月十八日 首尾
於 新宿区赤城社会教育会館

登 達 登 智 妙 侃 智 有

夕顔や

原 みね子 捌

夕顔や酔うてかほ出す窓の穴

まいまいつぶり落ちてぽっとり

ファックスで本社の指令届くらん

シェフのおすすめハーブクッキー

ふうはりと猫抱き上げて月の光ゲ

やうやう寒し明日は旅立つ

葛咲いて団地B棟行き止まり

女の文字が親展で来る

アオザイを着けてかなしき瞳となりぬ

チェックアウトにざっとスコール

翁

原 みね子

稲田 千寿

矢崎 藍

繁原 敏女

岡本 道子

藍

女

藍

女

返す波引きずってゆく塵芥

佐渡は流人の墓のいくつか

月冴えて仕手の上歌はれやかに

古稀の祝ひに届く寒鰯

次男坊苛められたり苛めたり

ビー玉十個うらかな昼

飛行船ゆったりとゆく花の山

蝶になりたる夢のさめぎは

平成八年七月十六日 首尾
於 豊田短期大学

藍 道 寿 女 藍 道 み 寿

昼の酒

時雨より先に上がりし昼の酒

千鳥歩みし跡のじぐざぐ

ドラマーは塾教師より転じきて

ワープロ名刺太き肩書

われとわが感じ入りたる鉄面皮

正座を解けば月の瘦せたり

白露をはねて駆け込む庫裏の土間

訴へごとをすかすがちやがちや

二つには分けられませんこのハート

放蕩の果縫る女房

膝おくり

峯田政志

今宮水壺

佛淵健悟

志

壺

悟

志

壺

悟

志

これやこの寒武利亜紀の骨が出て

複葉機にも下がる風鈴

幸せはすててこで見る里の月

ハンディフォンは垣外でやれ

このごろのホームルームの変はりやう

散切り嫗ひそと佇む

時の間を落花の挿頭おのづから

波乗舟に生まれくる蝶

平成八年十一月二十七日 首尾
於 西葛西「庄や」

壺 悟 志 壺 悟 志 壺 悟 志 壺

万 菊 の

矢 崎

藍 捌

万菊の軒ありけり伊賀の秋

大杉の秀に月のやや寒

弁当のサーモンサンド配け合ひて

ジャムセツシヨンのビート軽やか

人工の島の噴水とりどりに

にらめっこして守宮動かず

青々と剃りあとすがし少年僧

レモンのキッス誰が教へた

更くる夜を後妻^{うはなり}打ちの思ひあり

飯も貰へずつながるる犬

矢 崎 藍

岡 田 陽 邨

豊 田 好 敏

鈴 木 美 奈 子

平 尾 和 子

敏

美

藍

和

敏

首都移転誘致急げと署名くる

めっきり増へし子づれパチンコ

注連張りて韃祭にななめ月

ぐっと一杯ひっかける酒

還曆にシャネルスーツを贈らるる

雀も来ない街の陽炎

花の雲ささやかな日々抱きしめて

水平線の傾ぐふらここ

平成八年十月十二日 首尾
於 伊賀上野 栄楽館

邨 同 敏 邨 美 和 藍 美

春北風

吉村 ゑみこ 捌

春北風 大久保 センター 螺旋階

カウスター には 白梅の鉢

卒業式 吾子 高らかに 歌ふらん

小舎の 兎の 餌を とりかへ

稜線の ほのと 明らみ 月渡る

添水の 音に 茶人 そぼ 佇つ

吊^ッし 柿竿に 連ねて 八雲の 忌

ひと 筆書きで ゑがく 化け物

ここからは 独りが いいの 投げキッス

恋の 輪舞^{ロンド}は 初めに 戻り

秋元 正江

権頭 和弥

緒方 健

吉村 ゑみこ

松本 碧

健

弥

江

弥

碧

大臣も官僚もぐるいまいまし

鉄路に散りし手袋もまた

尾白鷺月をめがけてとび立ちぬ

国士無双のピン牌を待つ

のっそりと亭主持ち来る冷し酒

音痴球痴は親の遺伝か

舫ひ綱解けば散り込む花ふぶき

染めし卵に夢の色どり

平成八年二月十日 首尾
於 大久保地域センター

同 江 同 弥 健 江 同 碧

◆
百
韻
◆

百韻 うたぐるま

文音

ボーキサイトの山白みつつ
壁越しに産湯を沸かす声のして
おり紙やっど海老の形に

芸人の意地だけで来し大晦日
掃納して月のあかるく

綺羅や綺羅天牛の曳くうたぐるま

佛洵 健悟

青葉しずくに透かし見る空

浅賀 淑代

即席のパン焼き窯を取り巻きて

延長戦に入る実況

週末は潮風の香の別荘に

膨らんでくるささげ隠元豆

国道の人無き刻を照らす月

後部座席の露を拭いぬ

ニッポニア・ニッポンを待つウォッチング

駆け落ちなどと噂ひろまり

居酒屋の色紙に思い込めし歌

髭の濃ければ傷の隠るる

革命は傭兵隊に引きずられ

ニホ

道造の詩に挟むクローバー
春雷に駒帰りくる気配して

ちんちろりんの負けは負けとし

扁額の忍の一字傾きぬ

耳を搔かれる時のしあわせ

塩加減下女にあれこれ指図する

本陣の格きつと守りて

緑陰に出エジプト記ひらきおり

くらげのようにゆれている月

川沿いの靴工場は午報告げ

悟 代

燐寸占い続き聞きたく

酒焼けの手にも切符の渡さるる

津軽望郷ちちはのはの亡く

冬靄のなかに煉瓦の斜陽館

厚紙製のガンベルトなど

筆入れに小さくたたんだ合言葉

象形文字に頭寄せあい

葦舟は逆さになりておかのべに

遠流の宮を送る蝸

薄月に唄はつばやく風のごと

超能力が桃の実を割る

着族の菜食主義はゆるぎなし

千鳥格子の似合うフィアンセ

パチプロというなりわいを告げられず

六畳一間に陽のさしてくる

くつきりと涎の跡の参考書

腑分け始まるまでのざわめき

かごかきも今日はうごかぬ花見酒

悟 代

三

田子の浦辺にかぎろいの立ち

はぐるるか子鯨春の江に現るる

歩きながらの電話もどかし

国際部営業二課に三時なく

戦争は買い停戦は売り

粹狂が卵ダンスを囲む庭

痛風という鬼のいぬ間を

丸帯をとどけさせたる雪催い

蜜柑の匂う禿叱られ

ゴッホとはかの野良猫の名なるべし

科学室には不思議いっぱい

密林がやがて砂漠となる過程

アマゾン族に石笛の悲話

みどりごの揺籃濡らす月の光

煙草秋の蚊お断りです

獺祭忌ものもらいなど煩うて

またも言い出す季語の見直し

玉葱も胡瓜らっきよもピクルスに

代 悟

代 悟

離れ小島の籠城もよき

衛兵は箒さかさに持ちて立ち

消えたにようぼの時計ちくたく

ハニムーンはつかを過ぎし黄昏を

キリマンジャロは触れる近さに

猟犬の一声空を引き裂きぬ

硝子の街に夜番する月

ようように須磨の巻まで訳し終え

届くコニャック封は切らずに

花の雲越えゆく夢の熱気球

紙のひいなをお守りにする

^{ナオ}風光る還暦の日の教習所

長靴を履きけさもいそいそ

探知機に地下の秘仏が発気する

植木算にて計る永劫

ばらばらと床にはじけるアリナミン

美女らに左右の腕とられて

官能に溺れてもある締切日

代 悟

満月の夜を鵜の吐く息

相部屋の座頭身に入む物語

五右衛門風呂を貰うやや寒

ウォール街どこまで続く独歩高

ゲームソフトを弁護士も持ち

手帳には父親参観印す○

溽暑の回転扉くるくる

^{ナウ}南麓にキャベツは堅く堅く巻き

なお定まらぬ述懐の位置

珈琲の苦味酸味のほどよくて

トスカニーニもCDとなる

子ら走る終着駅の雨あがり

鳴き声で知る海馬のごきげん

この花の匂うや二十一世紀

のどかに過ぎる物売の午後

平成八年五月三十一日 起首

平成八年十一月二十九日 満尾

代 悟

あ

と

が

き

本集は、東明雅先生がお目通し下さいました諸作品を、三月二十四日、柏市加賀ふるさと会館に於て校正の運びとなったものです。

校正にご尽力下さいました、梅田利子・久保田庸子・桑原美津・須田智恵・長崎和代の諸氏に感謝申し上げます。

下 鉢 清 子

猫藁作品集 VII

平成九年四月吉日 発行

発行人 東 明 雅

発行所 猫 藁 会

定価 一、八〇〇円(送料実費)

印刷所 株式会社 岩田印刷







